

令和6年度 研究のあゆみ

自ら未来を拓き ともに生きる豊かな社会を創る
日本人の育成を目指す小学校教育の推進

～心豊かでたくましく ともに生きるための力を育む
活力ある学校づくりを推進する校長の理念と指導性～



大分県小学校長会

— 目 次 —

研究の概要

- I 研究計画 1
- II 各種研究大会の報告 4

研究部長会講演資料

- I 義務教育の現状と今後の方向性について 5
- II これからの教育を考える 38

第76回 九州地区小学校長研究協議会沖縄大会 分科会発表資料

- I 人権意識の醸成とともにある「認め合える集団づくり」の推進 66
- II 先見力・自学力を備えた教職員による自主的・機能的な研究・研修体制づくり
の推進 71
- III 主体的に命を守る力を高めていく防災教育の推進
～学校・保護者・地域と連携した防災教育の推進～ 76

各郡市からのレポート・実践報告等

- I 大分市 82
- II 臼杵市 86
- III 豊後大野市 92

おわりに

令和6年度 大分県小学校校長会 研究計画

- 1 研究主題 「自ら未来を拓き ともに生きる豊かな社会を創る
日本人の育成を目指す小学校教育の推進」

副主題

～ 心豊かでたくましく ともに生きるための力を育む
活力ある学校づくりを推進する校長の理念と指導性 ～

2 主題及び副主題に係る情勢

全国連合小学校長会は、真摯に研究と実践を積み重ね、我が国の小学校教育の充実・発展と教育諸条件の整備に努め、多くの成果を収めてきた。その成果を踏まえ、学習指導要領完全実施を節目として、令和元年度から研究主題を「自ら未来を拓き ともに生きる豊かな社会を創る 日本人の育成を目指す小学校教育の推進」と改め、その実現を目指し取組を進めている。

現在、情報化やグローバル化の進行、絶え間ない技術革新、急速に進む少子高齢化等により、社会全体の活力低下、人間関係の希薄化等が表面化するという、先を見通すことが難しい時代を迎えている。また、学校においては、学力や体力の向上、豊かな心の育成、安全教育・防災教育の充実、いじめ・不登校への適切な対応、人権教育や特別支援教育の推進等児童の健全育成、さらには人間関係をつなぐ力の育成も重要な教育課題となっている。「社会に開かれた教育課程」、「カリキュラム・マネジメント」、「主体的・対話的で深い学び」、さらにGIGAスクール構想の推進等、これまでにない大きな変革の時期をすでに迎えている。

大分県小学校長会においては、これまでに、夢と希望に向かう子どもの育成に向けた確固たる校長の理念と指導性の視点から研究を深め成果を上げてきた。今後は、次代を担う子どもたちが、これからの変化の激しい時代を生き抜くために必要となる、予測困難な状況でも主体的に自ら新たな価値を創り出す力や、多様な立場の者と協働しながら最適解を生み出す力など、持続可能な社会の創り手となるための資質・能力の育成を目指していかねばならない。

また、学校は時代の要請や社会の変化に対応するため、未来に向かう自信と意欲に満ち、様々な価値を尊重する子どもの育成に努める必要がある。そして、急速に変化する社会に対応し、経験のない困難に粘り強く立ち向かう子ども、何かを乗り越えようとするとき、自ら身についた力を十分に発揮することはもとより、周囲の多様な人々と互いに高め合い協働できる子どもの育成に努めなければならない。

以上のことを踏まえ、令和6年度大分県小学校長会は、全国連合小学校長会の研究主題のもと、副主題を「心豊かでたくましく ともに生きるための力を育む 活力ある学校づくりを推進する校長の理念と指導性」と設定し、研究部長会及び第64回研究大会宇佐大会、各種研究大会を通して、活力ある学校づくりを推進する経営の責任者である校長として、新たな時代に求められる理念と指導性を究明していきたい。

3 研究内容

研究副主題のもと、以下の5つを活動の重点に据え、研究部長会や研究大会を中心にして校長の指導性を究明していく。そして、第64回大分県小学校長会研究大会宇佐大会を成功させ、その成果を第65回大分県小学校長会研究大会日田大会につなげていく。また、研究部長会や研究大会等の還流を通して各都市の研究を積極的に推進する。

《 重点 》

- (1) ミドルリーダー等を効果的に機能させ、活力ある学校づくりを目指す校長の資質を高める研究活動の推進
- (2) 社会に開かれた創意ある教育課程の編成・実施・評価・改善に努め、「ともに生きるための力」を育む教育の推進
- (3) 教職員の資質能力の向上と働き方改革の推進
- (4) 今日的教育課題を的確に把握し、その解決を図る研究活動の推進
- (5) 第64回大分県小学校長会研究大会宇佐大会の成功に向けた研究・組織運営の充実、推進

4 研究活動

(1) 研究部長会（年3回）

教育内容・方法に関する研究協議・調査を行う。特に「社会に開かれた教育課程」の具現化を図るため、教育課程の編成・実施・評価・改善状況、学校組織の活性化に向けての校長の指導性等を把握し、今日的教育課題の解決に向けた研修・研究を行う。

(2) 会報「とよ」「研究のあゆみ」の発刊等の広報活動

- 会報「とよ」により、学校経営に関する情報交流と会員相互の連携強化を図る。
- 「研究のあゆみ」の発行により、活力ある学校づくりに関する研究資料とする。

(3) 各種研究大会

下記の研究大会に積極的に参加し校長自身が研鑽に励むとともに、実践交流を深め各都市の研究に生かす。

① 第64回大分県小学校長会研究大会 宇佐大会

○ 令和6年11月15日（金）

○ 開催地 宇佐市

全体会場：宇佐文化会館「ウサノピア」大ホール

分科会場：宇佐市役所、宇佐教育会館、隣保館、駅川公民館、宇佐公民館

大分県宇佐総合庁舎、宇佐市勤労者総合福祉センター 他

- 大会主題
「自ら未来を拓き ともに生きる豊かな社会を創る
日本人の育成を目指す小学校教育の推進」
- ・副主題
～ 心豊かでたくましく ともに生きるための力を育む
活力ある学校づくりを推進する校長の理念と指導性 ～
- 全員参加とする。

② 第76回九州地区小学校長協議会研究大会 沖縄大会

- 令和6年8月7日(水)・8日(木)
- 開催地 沖縄県那覇市
全体会場：那覇文化芸術劇場大劇場 「なはーと」
分科会場：那覇文化芸術劇場小劇場、沖縄県教職員共済会館、沖縄県市町村自治会館、
沖縄県南部合同庁舎、沖縄県体協会館、沖縄県立図書館

- 大会主題
「自ら未来を拓き ともに生きる豊かな社会を創る
日本人の育成を目指す小学校教育の推進」
- ・副主題
～ 多様な価値観をもつ他者と主体的・協働的に学び合い、
豊かな未来社会を創造する子どもを育む学校経営 ～
- 参加者数 894名(大分県は72名)

③ 第76回全国連合小学校長会研究協議会 徳島大会

- 令和6年10月24日(木)・25日(金)
- 開催地 徳島県徳島市
全体会場：アスティとくしま 多目的ホール
分科会場：アスティとくしま、JR 徳島駅周辺施設等

- 大会主題
「自ら未来を拓き ともに生きる豊かな社会を創る
日本人の育成を目指す小学校教育の推進」
- ・副主題
～ 夢と志を持って 多様な人々と協働しながら
持続可能で豊かな未来を切り拓いていく人財を育む学校経営の推進 ～
- 参加者数 2200名程度(大分県は25名)

(4) その他、必要事項

大分県教育委員会との連携を図りながら、教育施策等の理解と情報交換に努める。

令和6年度 各種研究大会 報告

- 1 第76回九州地区小学校長協議会研究大会 沖縄大会
 - 令和6年8月7日(水)・8日(木)
 - 開催地
沖縄県那覇市 那覇文化芸術劇場
 - 大会主題
「自ら未来を拓き ともに生きる豊かな社会を創る 日本人の育成を目指す
学校教育の推進」
 - ・副主題
～多様な価値をもつ他者と主体的・協働的に学び合い、豊かな未来社会を
創造する子どもを育む学校経営～
 - 大分県は72名参加(別府市・豊後高田市・玖珠郡の2市1郡が発表)

- 2 第76回全国連合小学校長会研究協議会徳島大会
 - 令和6年10月24日(木)・25日(金)
 - 開催地 徳島県徳島市 アスティとくしま
 - 大会主題
「自ら未来を拓き ともに生きる豊かな社会を創る 日本人の育成を目指す
小学校教育の推進」
 - ・副主題
～夢と志を持って 多様な人々と協働しながら
持続可能で豊かな未来を切り拓いていく人財を育む学校経営の推進～
 - 大分県は25名参加(発表者なし)

- 3 第64回大分県小学校長会研究大会宇佐大会
 - 令和6年11月15日(金)
 - 開催地
宇佐市 ウサノピア他
 - 大会主題
「自ら未来を拓き ともに生きる豊かな社会を創る 日本人の育成を目指す
小学校教育の推進」
 - ・副主題
～心豊かでたくましく ともに生きるための力を育む
活力ある学校づくりを推進する校長の理念と指導性～
 - 203名参加(県内18名の校長が発表)

第 76 回

九州地区小学校長協議会研究大会 沖縄大会

研究発表資料 I

第4分科会 「豊かな人間性」「健やかな体」

新たな社会を見据えた人権教育と 豊かな心を育てる道徳教育の推進

人権意識の醸成とともにある 「認め合える集団づくり」の推進

別府市立南小学校

校長 利光 聡典

第4分科会①

協議題 新たな社会を見据えた人権教育と豊かな心を育てる道德教育の推進
研究テーマ 人権意識の醸成とともにある「認め合える集団づくり」の推進

提案者 大分県別府市立南小学校 校長 利 光 聡 典

1 はじめに

本校が所在する別府市では第2期教育大綱において、「自分らしくしなやかに生きる自立した人」「互いを尊重し、『ふるさと別府』を愛する人」を基本理念＜目指す人間像＞に掲げ、時代の変化に柔軟に対応することのできる自立した人、違いやそれぞれが持っている能力を認め合い、互いを尊重する人、「ふるさと別府」を学び、「ふるさと別府」を愛する人の育成を目指している。

併せて人権教育が全ての教育活動の根幹を担うものと位置づけ、「心に響く授業研究」「差別をゆるさない仲間づくり」「全ての子どもの未来を保障」をテーマとした、人権教育の研究を進めている。

また、別府市生徒指導研究会では、研究主題を「冷やかし・からかい、仲間はずれ、身体接触の排除を目指して」とし、「認め合える集団づくり」に重点的に取り組んでいる。

これらの方針の背景には、増加する不登校児童生徒の現状や、家庭を含めた支援を必要とする児童生徒の現状等があり、「誰ひとり取り残さない」という別府市の教育の強い思いが込められている。

2 主題設定の理由

大分市との境に位置する、児童数225名（令和5年度、令和6年度208名）の本校において、登校渋りや学習への意欲に課題がある児童、家庭を含めた支援を必要とする児童は少なくない。

予測が難しいとされるこれからの時代、誰ひとり取り残さず、児童一人一人がそれぞれのwell-beingを実現していくための力を育成するためには、「子どもは子どもの中で育つ」ことを原点とした「認め合える集団」のもと、様々な環境にある児童一人一人の考えが尊重された協働の活動を通して、そのときの自分に向き合い理解するとともに、他の児童の思いを受け止めることで自身の考えをブラッシュアップさせていく、「学びとる」教育活動が必要であると考えた。

その指導・支援の根幹には人権教育の醸成が必須であり、自分自身と向き合う「ふりかえり」の活動を通して、自身の人権感覚に気づかせたい。

以上のことより、研究テーマを「人権意識の醸成とともにある『認め合える集団づくり』の推進」と設定し、以下の視点で研究を推進した。

3 研究の視点

- (1) 指導・支援に係るベクトルの共有
- (2) 人権教育の推進
- (3) 「認め合える集団づくり」に向けたふりかえり活動

4 研究の実際

(1) 指導・支援に係るベクトルの共有

学校教育目標の作成にあたり、別府市教育大綱等を確認するとともに、指導・支援の在り方について方針を示し、本校の課題と目指す姿について教職員の思いを集約した。その過程を踏まえることで学校教育目標の解釈を深め、指導・支援に係るベクトルの共有を図った。

① 指導・支援の在り方に係る学校長の方針

ア 力はいつつくのか

- ・自ら学ぶとき、学びとるとき（主体的）
⇒結果のみではなく、たとえ取り組むことさえできなくても、「悩んでいる姿を認めてあげる（褒めてあげる）」
→またやってみようとしてチャレンジする

イ 力はいつ伸びるのか

- ・自分をみつめたとき（ふりかえることができたとき、躓いたとき）、友だちの思いを聴けたとき⇒願いを高めたとき
「子どもは子どもの中で育つ」

② 職員アンケート結果

ア 学力・体力の向上について

- ・できた、わかった喜びを感じさせたい。
- ・みんなと一緒に学びたいという気持ちを育てたい。
- ・自己の学びや成長を実感させたい。
- ・目標の向かって粘り強く取り組む力を育てたい。 など

イ 子どもの実態に寄り添った支援について

- ・支援を繋ぎ、課題や成果を共有して「学校が楽しい」と思えるように支援を進めたい。
- ・一人一人の困りを受け止め、家庭との連携を密にしていきたいなど。

ウ その他

- ・取組の精選を行いながら、地域との連携を進めたい。
- ・職員で困りや状況を共有する場を設けて語り合い、同じベクトルで進んでいきたい。

③ 学校教育目標（令和4年度から継承）

本気で「学び」「行動し」「きたえる」南っ子の育成

ア 指導・支援に向けた解釈

『学び』：「互いに」「自分をみつめ」

『行動し』：「自分から」「相手をおもいやり」

『きたえる』：「夢（目標）に向かって」

「あきらめず 再チャレンジ」

④ 目指す子どもの姿

・自ら取り組み、ふりかえり、自分を高めようとする姿

⑤ 重点目標

・基礎的・基本的な学力の定着

・認め合える集団づくり

⑥ 児童へ（集会等の校長訓話のキーワード）

「本気で」「考える」「自分から」

「いのちはひとつ～自分と友だちを大切に
する、みんなが楽しい～」

(2) 人権教育の推進

① 南小学校人権教育目標

ア 積極的に関り、違いを認め合う仲間づくり

イ 差別を許さない人権感覚の育成

「差別をしない、差別を許さない、差別に負けない」という人権尊重の精神に立ち、「積極的に人とかかわり合う」ことで、自他の違いを認め合い、自分の大切さとともに他の人の大切さを理解し、共に学んでいこうとする子どもを育成する。また、差別を許さない人権感覚と行動力を養う。

② 目指す子ども像と各学年部の目標

ア 目指す子ども像

・学びに向かい、自己実現していこうとする姿

・自分自身に向き合い、超えようとする姿

・めあての達成に向かい、仲間と共に取り組もうとする姿

イ 各学年部の目標

・低学年の目標

友だちの考えを最後までよく聴き、友だちの気持ちやよさに気づき、生活に生かす。

・中学年の目標

自分の考えとどう違うのか最後までよく聴き、自分の見方、考え方を広げ、生活に生かす。

・高学年の目標

友だちがなぜそう考えたかを関心を持って聴き、自分の見方、考え方を見直し生活に生かす。

③ 具体的な取組

ア 教職員

・フロア会議（毎月1回 1～3年及び4～6年に分かれて実施）・子どもの実態を出し合い、取組や支援方法を話し合う。

・校内研、校外研修会への参加

・人権参観日に向けての授業づくり

・QU アンケートの活用など。

イ 児童（「積極的に人とかかわり合う」取組）

・縦割り班（なかよし班）活動

毎日のなかよし班掃除、挨拶運動、折り鶴集会 など

・人権平和委員会による集会（年4回）

・人間関係づくりプログラム（週1回以上）

・幼稚園や地域の方との交流など。

ウ 保護者・地域（「積極的に人とかかわり合う」取組）

・人権参観日

・全学年対象の放課後学習支援（オワルンジャー）

・読み聞かせボランティア「にじのたね」による読み聞かせ活動（毎週水曜日）

・新校舎落成20周年記念式典、きらめきコンサート

・運動会地踊り（やっつき）など。

④ 教職員の人権感覚をふりかえる取組

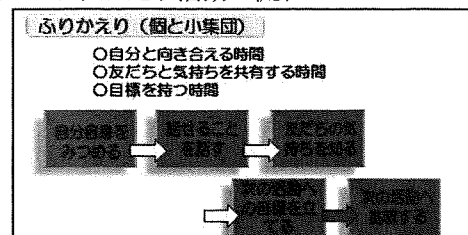
校内研修において、別府市共生社会実現・部落差別解消推進課の指導主事を招聘し、「被差別の立場の当事者からの学び」の学習を通し、特定職業従事者としての責務を再確認するとともに、グループワークを通して自身の人権感覚をふりかえった。

(3) 「認め合える集団づくり」に向けたふりかえり活動

① 自己理解を深めることに重点を置いたふりかえり活動

体験を通したふりかえりは、「そのときの自分に気づく」きっかけとなる。自己理解を促すとともに、友人と本音で考えを交わすことによる変容と、自身で新たな目標を見出すことを期待したふりかえり活動について研修し、発達段階に応じた実践を行った。

ア ふりかえり活動の流れ



【資料1 ふりかえり活動の流れ】

この活動を繰り返すことによって、「聴いてくれる」「話してもよい」と思うことができ、児童間で本音を語れるようになることを期待した。

イ ふりかえりシート

令和5年度 市小学校運動会 「全校みんなで心をあわせて本気で楽しもう」

<運動会ふりかえりシート> ()年()組 なまえ()

- どんな運動会にしたいと思っていましたか。

●目標の確認
「どんな気持ちで取り組もうとしていたのか。」
- 運動会に向けた自分の取組と、運動会での自分をふりかえり、「できたこと」「できなかったこと」「気づいたことや感じたこと」などを書いてください。

●自分と向き合う時間
自己理解を促す時間
- 2で書いたことのうち、話せることをグループのなかで発表してください。

●友達の気持ちを知る時間
共有する時間
変容へのきっかけ
- ともだちの発表を聞いて、思ったことを書いてください。

◆心の変容が現れる場
- これからの生活に向けて、がんばっていきたいと思うこと(目標)を書いてください。
※クラスでの生活や、11月の「20周年記念式典・きらめきコンサート」をイメージしてください。

●「ふりかえり」から、
自分自身の新しい目標を立てる場

【資料2 ふりかえりシート(例)】

ウ 教職員間の実践

6月の校内研修にて、教職員を小集団に分け、各々の困りや悩みを出し合った。

8月の校内研修では、ふりかえりシートを使って、「どんな一学期にしたいと思っていたか」について自分自身をふりかえり、小集団で「話せること」を話す機会を設定した。

自身の思いを率直に話す職員の発言を受け、「聴いてくれる」「話してよい」と思えた職員は少なくないと感じた。ともに働くなかまの思いの中には、これまで気づいていなかったものもあり、相互理解を促すとともに、自身の在り方を見つめる時間となった。

エ ふりかえりシートから

【9月運動会後の実践】

<友だちの話を聴いて思ったこと>

・かけっこで一位になれなかった人も、一生懸命したんだなあと思った。僕も本気で頑張った。もっと頑張ればよかった。みんなが楽しくできていてよかった。くやしかったと言っている人の気持ちがわかった。次はあきらめたくない。(2年)

・自分の反省点をたくさん見つけていてすごかった。みんな、それぞれの目標を貫くことができている。みんな、いろんなことに全力で真剣に取り組んでいる。みんな、くやしかったり、うれしかったりしたんだということがわかった。人それぞれでできなかったことが違って、自分にはできなかったことがみんなにはできていたりしてすごいと思った。できなかったことを言っている人が多くて、それだけ全力だったと思った。(6年)

<これからの生活に向けてがんばっていきたいこと>

・公民館祭で踊りを大きく踊りたい。本気でみんなと心を合わせて取り組みたい。(2年)

・学級目標「ONE TEAM」を目指したい。クラスのみんで「ONE TEAM」を成功させたい。人の気持ちを思いやり、何事も全力で挑戦したい。本気で取り組んで本気で楽しみたい。下級生の手本になりたい。(6年)

【11月「校舎落成20周年記念式典・きらめきコンサート」後の実践】

<友だちの話を聴いて思ったこと>

・いろいろなことに気づいているんだと思った。緊張したと言っている人は僕と同じだと思った。そんなにアイデアがでるんだ!と思った。私以外の人も間違えられないと思っていたんだと思った。なるほどと思った。(2年)

・みんな本気で取り組んでいた。くशीいと言っている人がいた。それだけ熱心だったんだと思った。みんなすごく悩んだんだなと思った。一人一人ががんばっていたんだなあ~と感じた。共感できることがいっぱい出てきた。(6年)

<これからの生活に向けてがんばっていきたいこと>

・きらめきコンサートのように本気で学校で過ごしたい。音楽は嫌いだけどがんばる。みんな仲良く楽しく頑張っていきたい。けんかしない。朝はやく登校する。(2年)

・何に対してもめげずに頑張っていきたい。「ONE TEAM」を実現する。下級生のお手本になる。下級生に憧れてもらえる6年生でありたい。自分の意見を友だちに伝える。悪口を言わない。言い合いを見かけたら見て見ぬふりをしない。いろいろな人に優しくできる自分でいたい。人の嫌がることを絶対にしない。

② 令和5年度「認め合える集団づくり」に係る 児童・保護者アンケート結果

A: そう思う B: まあまあそう思う C: あまりそう思わない D: そう思わない

児童アンケート		A	B	C	D	A+B	C+D
1	自分のよいところを知り、自分のことを大切にすることができている。	39%	38%	17%	6%	77%	23%
2	友達のよいところを知り、分け隔てなく友達を大切にすることができている。	61%	36%	2%	1%	97%	3%
3	「仲間はずし」や「いじめ」をせず、友達と仲良くできている。	77%	20%	3%	0%	97%	3%
4	係や当番の仕事にまじめに取り組み、クラスや友達の役に立っている。	51%	39%	9%	1%	90%	10%
5	困ったことや悩みがあるときはお家の人や先生、友達に相談できている。	41%	34%	19%	6%	75%	25%
保護者アンケート		A	B	C	D	A+B	C+D
1	相手を思いやった言動について家庭内で話をした。	49%	44%	5%	2%	93%	7%
2	お子さまは自分のよいところを知り、自分を大切にしている。	36%	51%	13%	0%	87%	13%
3	お子さまは、友だちのよいところを知り、わけへだてなく友だちを大切にすることができている。	41%	53%	6%	0%	94%	6%
4	ご家庭で、お子さまに役割（手伝い）を作り、実践させている。	34%	44%	20%	2%	78%	22%
5	お子さまは、保護者へ困りや悩みを伝えることができている。	35%	57%	8%	0%	92%	8%

【資料3 令和5年度児童・保護者アンケート結果】

5 成果と課題

(1) 成果

「認め合える集団づくり」に係る児童アンケートの肯定的回答の結果は概ね良好と言え、一定の成果があったものと評価できる。特に友だちの良さに気づくことができている、本研究の取組が人権意識の醸成と「認め合える集団づくり」に繋がっていると捉えている。

また、取組を展開していくなかで、指導・支援に係る職員のベクトルの共有は必要不可欠なものであった。自身の経営方針と職員の声を擦り合わせ、学校教育目標の解釈を改めて理解しあえたことで、現状の子どもに即した指導・支援を構築し、実践していくことができたことと捉えている。

さらに、人権教育の推進に向け、グループワークで意見交流を行ったことが、職員が自身の人権感覚について疑いを持ち、常にふりかえり、磨き、子どもに向き合っていくことの必要性について再認識するとともに、互いの思いを出し合うことで同僚性を築くことに繋がった。人権教育を全ての教育活動の根幹と位置づけ、自己理解・相互理解を促す研修を継続していくことの効果を実感することができた。

(2) 課題

「認め合える集団づくり」に係る児童アンケートの「自分のよいところを知り、自分のことを大切にすることができている」「困ったことや悩み

があるときは、お家の人や先生、友達に相談できている」に関する問については20%を超える児童が否定的な回答をしており、「自尊感情を向上させる取組」と「教育相談体制の充実」を更に進めていく必要がある。

さらにその他の問においても、「そう思う」と回答するまでの実感には至っていない現状、少数であっても否定的な回答をする児童がいるという現状を重く受け止め、取組を更に具現化していく必要がある。そのためには、変容する児童の状況の把握と職員間での情報共有、合意形成に向けた協議が必要不可欠であり、定例のフロア会議等を活用し、指導・支援のベクトルを今後も随時合わせていきたい。

「認め合える集団づくり」に向けたふりかえり活動に係る専用のシートで示すねらいに即した実践は、これからの継続研究となる。取組を継続していくことで、自身の良さや成長、可能性に気づくとともに、「聴いてくれる」「話してもよい」と思うことのできる、安心できる集団になること、そして、本音で語りあうことのできる集団になることを期待している。「子どもは子どもの中で育つ」という思いのもと、意見の相違があったとしても、人権意識の醸成とともにある「認め合える集団」を通して、児童の変容・成長を促したい。併せて、教職員においても思いを語り合うふりかえりの会を継続し、共に働く集団づくりと、自己理解、相互理解に基づくスキルアップを図っていききたい。

6 おわりに

別府市小学校校長会にて意見交換を行いながら進めた本研究を通して、「認め合える集団づくり」に向けた取組の効果と課題が明らかになった。別府市教育大綱に基づき、「誰ひとり取り残さない」学校経営に向けて、全ての小学校が各校の課題に応じた取組を展開しているが、本研究は、その具体の一つとなり得たものと捉えている。各校の校長の連携を進め、意見交換を行うことで別府市の課題解決に向けた取組が更に推進していくものと実感できた。

令和6年度、本校においては、強みを、様々な背景を抱えつつも「素直」で「前向き」、「本気」になれる子ども（そのことに向けた指導の定着）と捉え、課題を「自尊感情（自己肯定感・有用感）の醸成」「悩みを打ちあけられる関係」とし、本研究に継続して取り組んでいる。

子どもたち一人一人が自分自身に可能性を感じ、夢（希望）を持って卒業していけるように、全ての教育活動の根幹を人権教育とした取組を、更に展開していきたい。

第 76 回

九州地区小学校長協議会研究大会 沖縄大会

研究発表資料 Ⅱ

第5分科会 「研究・研修」

教職員の資質・能力の向上を目指した 研究・研修体制の充実

先見力・自学力を備えた教職員による 自主的・機能的な研究・研修体制づくりの推進

豊後高田市立桂陽小学校

校長 瀬口 卓士

第5分科会①

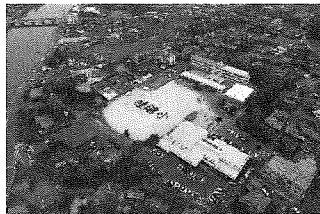
協議題 教職員の資質・能力の向上を目指した研究・研修体制の充実

研究テーマ 先見力・自学力を備えた教職員による自主的・機能的な研究・研修体制づくりの推進

提案者 大分県豊後高田市立桂陽小学校 校長 瀬口卓士

1 はじめに

本校は令和4年度、開校150周年の節目の年に地域や家庭と連携を図りながら計画してきた全ての記念行事やイベントをコロナ禍の中でも無事に実施することができた。その要因には、明治5年、旧島原藩高田役所跡地の願い下げを受け、桂川の陽岸（陽が昇る方向の岸）にある「桂陽学校」として開設した豊後高田市で一番に古く、「歴史ある学校」を自負する学校愛が地域に連綿と引き継がれていることが挙げられる。



昨年度、151年目の新しい歴史の1ページを地域や家庭との協働的な取組の中で、常に「創造し発信し続ける学校」として紡いできた。そして本年度は、歴史をつないでいくための確かな絆を深められる1年間となるよう、持続可能な研究・研修体制づくりの確認を行っている。

現在、児童数は、329名で、学級数は、14学級（支援学級2）であり、本市の「田舎暮らし日本一」の移住・定住施策の効果や無料の市営塾「学びの21世紀塾」の学校教育施策を中心とした「教育のまち」づくりの取組が評価をいただき、9年連続して児童数が増加の傾向にある。（平成28年度246名）

本研究の取組も、市内の全ての小学校が喫緊の教育課題を共有し、教職員の人材育成のための研究や研修体制の充実を図り、「働きがい改革」の課題解決を目指して、実践・研鑽を深めることとした。

2 主題設定の理由

現在、全国的に学校現場において教職員の心身の健康を第一に「働き方改革」の名のもと、学校の業務改善が急速に図られている。その取組として、教職員の負担軽減のための学校行事等のカリキュラムの見直しや勤務時間をもとにした業務や日課表の改善策が推進されている。

その一方、教育改革としてGIGAスクール構想への急転換により、個別最適な学び環境の整備の一環として1人1台端末による学びが一段と進んでいる。その活用にあたる教職員に求められる資質・能力は、今後、さらに進化していくと考える。果たして、この状況をいかに学校現場で、子どもの将来を

見据えた力の育成の取組に進展させていけるのかが問われている。

本校では、働き方改善による「働きがい改革」と銘打って、児童につけたい資質・能力の育成にあたって、その取組が、教職員の資質・能力の向上のためとなり、ひいては地域や家庭を巻き込んだ「協働した学びに向かう力」の育成につながることを目途に教職員の研究・研修体制づくりの改善を図っている。そのためには教職員の先見力と自学力（自ら学びに向き合い、学び合い、学びを創る力）の育成こそが、受け身ではなく、主体的な意欲を高め、研究・研修に向き合う際に、効果的に機能し、持続可能な資質・能力の向上につながる要因と考えている。

そこで、校長として教職員と真摯に向き合い、お互いの先見力や自学力を高め合いながら、学校課題の重点的な取組に絞り込み、主体的にPDCAサイクルを実働化させていく研究・研修体制づくりの成果や課題について提案する。

3 研究の視点

- (1) 年度を跨ぐ系統的なカリキュラム・マネジメント力を培う研究・研修の充実
- (2) 地域や家庭、保幼小中高と目標協働達成に向けた研究・研修の推進
- (3) 持続可能な研究・研修体制づくりの取組

4 研究の実際

- (1) 年度を跨ぐ系統的なカリキュラム・マネジメント力を培う研究・研修の充実

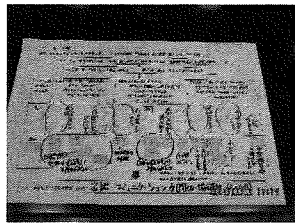
年度を跨ぐ系統的なカリキュラム改善ができるよう、教務・分掌主任のマネジメントによる校内運営委員会を2月から計画的に6回、開催し、年度末には、教職員間でその成果と課題を明確にして共通理解を図り、次年度の取組への布石づくりを行った。



- ① 主任のプランニングによるPDCA機能の充実

昨年度末において、各種主任を中心として、一人ひとりの教職員が学校経営への参画意識をもち、学校の教育目標達成に基づいた教育課

程の実践の成果や課題を明確にし、カリキュラム・マネジメントの視点を取り入れた研究や研修の改善を図った。



ア 学校の強みと弱みを分析する力の育成研修

一年間の教育課程を振り返って、学校や児童、地域や家庭にとって、「現状は、どの段階までできているのか、あるいはできていないのはなぜか」を具体的に全教職員で「取組改善設定シート」に評価を行った。そのとりまとめをもとに3つの分掌チームで検証・分析を行ったあと、全体の意見交換研修を行った。

イ 学力向上・体力向上・児童支援対策プラン等の活用力育成研修

各種プランの策定にあたり、各分掌主任に児童の実態や変容をもとにした分析を行わせ、各学年部や関連する校務分掌部会において研修の場を用いて検証させた。協議で改善・決定したプランにそって、常時、改善点を上書きさせながら、実証して活用できるように心がけさせ、運営委員会や校内研修の場で再提起や改善を行わせた。

② 「目標協働達成ファイル」「桂陽っ子3つの力育成シート」を活用した教職員の資質・能力の育成

学校の教育目標や組織的に定めた重点目標の達成に向けて、教職員自らが学校経営への参画意識を高めながら、同じベクトルで課題解決が図られるよう、研究・研修的な取組として「目標協働達成ファイル」や児童の「桂陽っ子3つの力育成シート」を活用した。そして、さらに、その取組を教職員人事評価システムの取組と「連働」させ、自らの目標管理評価との一体化を図った。

ア 「目標協働達成ファイル」の研究・研修的取組

ファイルの中には、学校経営や運営のスタートにあたって、文科省や県教委、教育事務所、市教委等の方針や指針をはじめ、本校が系統的に進めているカリキュラム・マネジメントのビジョンや取組を全て、教職員本人が意識して綴じ込め、取組の確認や活用ができるようにしている。この意識化を図る取組が、教職員自らが主体的に学校経営に参画していこ



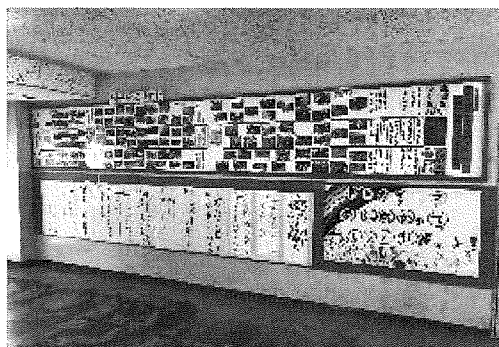
うとする姿や児童の学びの手本となれるよう学びに向かう姿として表出し、先見力や自学力の育成につながっている。

イ 校長による「目標協働達成ファイル」を活用した面談や所見による改善力育成研修

毎月、自主的に教職員が時間や場所を見つけて校長と面談し、その要望の応えや方向性を見出せるように所見（言葉に託す）にして返している。また、その状況を教頭や教務主任とも共有し、いち早く学校の取組改善や「働きがい改革」につなげられるようにもしている。

ウ 「桂陽っ子3つの力育成シート」を活用した研修・研究

各担任は、児童と学期始めに学校の3つの重点的取組を共通理解し、シートに自分のめあてやその手だてを具体的に記載させ、教室や廊下に児童同士で共有できるように掲示している。学期末には、全児童が達成状況を言葉や4段階評価でまとめ、改善できるようにした。学校全体の取組としても、児童同士でめあての達成状況を共有し合うために、児童が行き交う場に、学期末に行った評価や活動の写真を掲示し、全体に見える化して改善につなげている。



③ 小学校中学年からの教科担任制の積極的な導入と取組研究

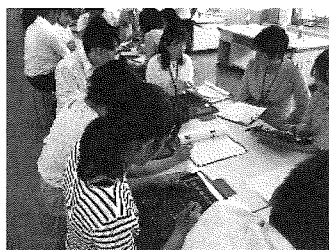
教職員の自主的な研究・研修体制を推進し、学級経営や授業改善、生徒指導等、児童に向き合う取組として本校では、平成18年、リーディングスクール指定を受けてから、教科担任制を実施している。本年度から、さらに教科部会を設けて研究を推進している。

ア 得意教科における教科指導力の育成研修

教職員の得意教科による1年生からの合同・交換授業、3年生からの専科授業等を日課表作成時に計画的に行っている。また、授業づくりにあたっては、学級担任との連携を図らせ、カリキュラム・マネジメントによる教科横断的な単元構成に注視させた。

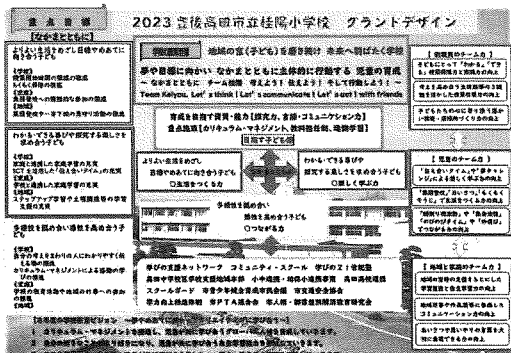
イ タブレット等のICT機器を有効活用した研修

中学年からの持ち教科数の削減を積極的に行いながら授業づくりのための教材研究時間を短縮させた。その取組により、生み出された時間で、デジタル教科書やタブレット教材等の効果的な利活用やICT機器を有効的に活用した授業づくりのための研究・研修時間を十分に確保できるようになっている。また、教職員同士で、複数学級の授業で用いる教材やワークシート等をタブレットで児童に利活用させたり、学習アプリを使って振り返りのための自主学習をさせたり、評価を見取らせたりする実践研修にもつながっている。この取組を通して、教職員同士でその実践をもとに成果や課題を共有し、改善につなげるための学年部会も毎週、自主的・計画的に行える時間を確保できるようになった。



(2) 地域や家庭、保幼小中高と目標協働達成に向けた研究・研修の推進

学力向上の喫緊の課題として、家庭での課題学習との「連働」と地域や保幼小中高との「協働の学びづくり」が挙げられる。それは、授業で培った学びに向かう力や学び方のスタンダードが、家庭環境によって変わることなく、家庭と協働して取り組める指導力が担任に求められる。また、地域の教育力や校種間連携を生かし、カリキュラム・マネジメントの視点で、授業者自らが、PDCAを意識して検証し、より効果的な授業づくりに反映させることも大切である。そこで、学校運営協議会（コミュニティ・スクール）の協働目標にその課題解決を共通して位置づけ、学校運営評価委員会等の外部検証に基づいた校内研究・研修として重点的に取り組んでいる。



① 「夢チャレンジノート」の取組の目的共有と実践研究

個別最適な学びの原動力となるものは、自ら「学びたい、知りたい、わかりたい」と実感させる学び体験や体感と考える。その場として探究的な自主学習の在り方を目途とする「夢チャレンジノート」の取組を3年生以上の児童に提起し、地域・家庭と連携して研究に取り組んでいる。

ア 教職員による「夢チャレンジノート」研修

授業で欠かせない学習規律や学習習慣を家庭学習と「連働」させながら、教室での授業スタンダードに反映できるよう、教職員間の自主学習指導をもとにした課題と成果を出し合い、新たな学習の手引きや進め方を児童やその保護者と共有してきた。そして、常に、アンケートによる評価や分析を開示し、改善につなげている。

イ 自主学習による児童の学びを深め、広げる取組

全員で取り組む姿勢を大切にするために、常時、全ての児童のノートを廊下に展示し、互いに、学び方や学習内容の利活用ができるよう、担任がタブレット機器等を活用させながら取組を促進させている。その効果として、授業の隙間時間や自習時、雨の日の休み時間の過ごし方の工夫時にノートやタブレットを開いて、調べ学習に励む児童の姿が見られるようになった。



② 地域や保幼小中高と連働した授業づくり実践研修

地域人材の活用による専門的な授業を単元構想に基づいて、効果的、計画的に各教科や総合的な学習の時間等に横断的に取り入れる研修を行った。

ア 学年部によるカリキュラム・マネジメントをもとにした地域のリソース（ひと・もの・こと）活用・改善

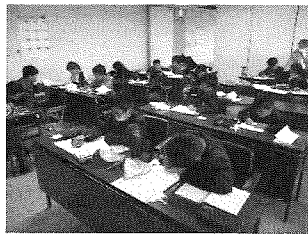
コロナ禍以前の出前授業や移動授業の見直しを、カリキュラム・マネジメントの視点や授業改善をもとにして、学年部研修の場で具体的に「必要か必要でないか」を論議させ、重点的な取組として行った。

イ 保幼小中高の連携による授業づくり研修

本市では、市教委の指導のもと校長会部会を中心に保幼小連携や小小連携、小中連携、

小高連携の体験活動や合同行事、授業乗り入れ等を計画的に行い、自校の研究の取組に反映できるよう推進している。さらに、教職員は、所属する豊後高田市教育課程研究協議会の教科・領域部会で、授業研究を推進しながら学校間の共通理解や研究環流を行い、スキルアップにつなげている。

さらに、各学校のミドルリーダーは、マネジメント・リーダー研修に定期的に参加し、学校組織マネジメントの在り方を学んでいる。その学校間や地域間をつなぐ大きな学びのネットワークとして放課後の児童の学び環境を整備した「学びの21世紀塾」が教職員の地域貢献力や教育力向上の一助となっている。

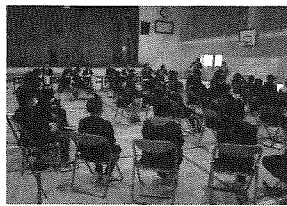


(3) 持続可能な研究・研修体制づくりの取組

免許更新制の発展的解消に伴い、教職員の校外・校内研修の有り様が重要視されるようになった。初任者研修をはじめ、ステップアップ、フォローアップ、中堅教諭等資質向上、キャリアアップ、専門研修等の対象者が各研修会で学んでいるが、その環流がうまくできていなかった。そこで、研究・研修テーマを一点に絞り込み、互いに校内で時間を作り、学び合える体制づくりを行った。

① 「伝え合いタイム」の共通理解と実践研修

児童の主体的・対話的な深い学びを作り出すための場を「桂陽っ子の伝え合いタイム」と位置づけ、授業改善の重点的取組として行っている。教職員は、悉皆研修として提案する授業時に指導案を作成し、事前に分掌部会や学年部会で審議し、「伝え合いタイム」時を中心に互見授業として行ってきた。その時の資料となる、指導案や板書計画、ワークシートや事後記録等は、すべて教職員用タブレットのロイロノートで管理し、互いの考えや意見をもとに次の授業に反映できるようにしている。



② 研究・研修データの年度を跨ぐ円滑な移行

学校全体で取組を進めてきた研究や研修の成果や課題を次年度に引き継ぐことは、紀要等のまとめで活用できても、データとして利活用することは、あまりうまく機能してい

ない。その対策として、研究主任によるデータのフォルダ化を推進させ、教職員が一年間、それぞれの研修で培った実践の成果物を重点的取組フォルダとしてデータにして見える化を図り、次年度につないでいる。

5 成果と課題

(1) 成果

喫緊の課題と向き合い、地域や家庭と連携しながら学校が一つの「チーム桂陽」となり、児童に付けたい資質や能力の育成を目指して実践していると実感できるようになった。それは、教職員自らが、人材育成やキャリアプランの構築を目指した目標協働達成の取組を、先見的な視点で、前年度からの成果と課題をつないでいこうとする思いが面談や授業改善等の場で窺えるからである。また、教科担任制やICT機器活用には、当初、戸惑いはあったものの各種主任の計画的なマネジメントによる研究・研修が行われることで、トップダウンからボトムアップの学びや研究・研修の意識に変革してきている。さらに、児童の変容や成長の姿が、成果として感じられるようになったことも忘れてはならない。

(2) 課題

教職員の年齢構成やそのキャリアには違いがあり多様化している。その中で変わらないものが学校組織の一員として、子どもの実態を中心に据えて学校や学級、そして授業をマネジメントできる力と考える。そのためには、地域や家庭の協力や連携がなければ、目標やめあてもはっきり持てない。だからこそ、教職員自身が、研究や研修の場で学び続ける姿を発信し、見える化を図っていくことが求められる。これからも教職員が、授業改善力や指導力の向上を図りながら、自主的・機能的に研究・研修に関わり続けられる体制づくりを、「先見力育成」を大切にしながら行いたい。

6 おわりに

本研究にあたり、市校長会部会でそれぞれの学校における喫緊の課題や取組改善策の共有や協議を行わせていただくことで、自校の取組改善や他校への研究アプローチにつなげることができた。本校の教職員は、市全体でベクトルを合わせて各種研究・研修に取り組むことが多く、そこで得られた成果や課題を自身のキャリアプランに着実につなげている。校長として、全ての教職員が、次の新たなステップの場で、豊かな経験値をもとに実践をつなげていけるよう、本校で大切にしてきた「先見力」や「自学力」を培う場を生かし、引き続きブラッシュアップしていきたい。

第 76 回

九州地区小学校長協議会研究大会 沖縄大会

研究発表資料 Ⅲ

第7分科会「学校安全」「危機対応」

危機回避能力を育む安全教育・防災教育の充実と
地域や関係機関との連携を図った
安全教育・防災教育の推進

主体的に命を守る力を高めていく児童の育成
～学校・保護者・地域と連携した防災教育の推進～

玖珠郡九重町立飯田小学校

校長 櫻井 弘美

協 議 題 危機回避能力を育む安全教育・防災教育の充実と地域や関係機関との連携を
図った安全教育・防災教育の推進

研究テーマ 主体的に命を守る力を高めていく児童の育成
～学校・保護者・地域と連携した防災教育の推進～

提案者 大分県玖珠郡九重町立飯田小学校 校長 櫻 井 弘 美

1 はじめに

九重町では、少子化による児童生徒数の減少が急激に進み、中学校は平成25年に4校からこのえ緑陽中学校の1校に統合した。統合の際に、地域から中学校入学時点での6小学校間の指導の格差や、中1ギャップ、いじめ・不登校の増加を心配する声があがった。そこで、町民全体に対して意識調査を行い、課題を整理し、九重町の教育の方向性を出し、「このえ学園基本計画」を策定した。

「このえ学園基本計画」の目的は、九重町の抱える教育課題を解決するために、子ども園・小学校・中学校・公民館を中心に保護者・地域住民・各種団体が協議・連携して取り組むことにある。この目的を達成するために、5年生から始まる6校の小学生が集まり学習する集合学習や郷土を愛する心を育む「このえ学」等、様々な取組を行っている。

2 主題設定の理由

「このえ学園基本計画」に基づき、令和元年に小学校6校で合同の「このえ小学校運営協議会」を設置し、6小学校が連携して進める「このえ学園」の運営方針の承認や町内における統一課題の解決に取り組むことになった。このえ小学校運営協議会は、6つの小学校長・保護者代表、子ども園園長・保護者代表、中学校校長・保護者代表、公民館代表、教育委員会で構成されている。このようなメンバーで九重町の抱える教育課題についてどのようなものがあるか熟議を行ったところ、

- ・学校と地域との関わり方はどうすればよいか。
- ・災害時の小中・子ども園の連携をどのようにすすめるか。

などが出され、このえ小学校運営協議会として、小中連携した防災訓練を実施する方向で意見がまとまった。

学校における危機管理は、多種多様にわたるが、自然災害に対する危機管理は学校安全の基礎的・基本的なものである。自然災害に対してどう対応し、いかに幼児・児童・生徒（以下、児童生徒等とする）を守るかについて、近年の学校の現状と課題から検討する必要がある。

九重町のここ10年間をみても、平成28年の熊本地震による災害、令和2年7月豪雨災害、令和5年7月豪雨災害と多くの自然災害に見舞われてきた。児

童生徒の中には、家が浸水したり、通学路が崩落したりして、避難生活を送ったものもいる。6小学校それぞれの地域において想定される災害は異なる。地域（ふるさと）を知ることが、防災教育につながると考え、経験や学習をもとに各学校では、防災教育を行ったり、危機管理マニュアルの見直しを行ったり、保護者と協働で訓練を行ったりしている。

3 研究の視点

- (1) 自他の命を守る安全に関わる実践・取組
- (2) 小学校と子ども園、中学校、児童クラブ、教育委員会等の関係機関との連携

4 研究の実際

(1) 九重町立淮園小学校の取組

① 概要

淮園小学校は、山間部に位置し、緑豊かで、自然に恵まれた地域である。歴史ある宝泉寺温泉・川底温泉・生竜温泉があり、町内でも観光地の一つとしてあげられる。しかし、2020年の7月豪雨で大規模な土砂崩れ、家屋の浸水、道路・農地等で甚大な被害が発生した。地域の方々の熱意や努力、行政の取組によって復旧が進み、今年宝泉寺温泉で「星祭り」が開催された。その催しの中で、本校の5・6年生が「ホタルの研究」発表を行った。ホタルが多く生息する宝泉寺地区にある本校では、伝統的に総合的な学習の時間を中心に「ホタル学習」を教育課程に位置づけている。

令和4年度に九重町で防災教育推進校に指定され、大分大学防災・減災センターと連携を図りながら防災教育について校内研修を行い、1年間実践してきた。地域と防災教育とが関係を持ち始めた本校に着任した校長としてすべきことは何か。児童の命を守る学校をどのように作っていくか。令和4、5年度の2年間の防災教育を軸とした学校づくりを通した主体的に学び、命を守る力を高めていく児童の育成に取り組んでいる実践について述べていく。

② 令和4年度の取組

学校と地域が連携した防災教育の取組から、防災教育が教育課程の軸となること、地

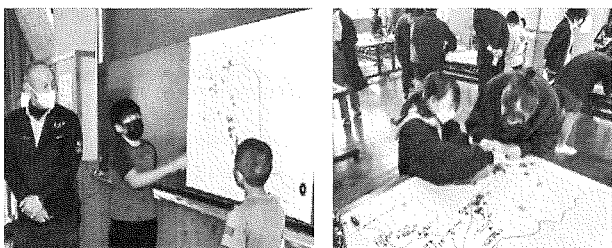
域を学ぶ「ふるさと学習」につながる事が明らかになり、防災教育を年間計画に位置づけ、教職員も研修、実践を重ねている。

1. こども園・小・中学校合同一斉引き渡し訓練 (6/20)
2. 着衣泳 (7/6)
3. 防災教育講演会 対象:教職員 (7/6)
4. 4・5・6年フィールドワーク (10/21)
5. 「防災マップ」づくり (11/9)
6. 防災教育講演会 対象:保護者 (12/2)
7. 防災新聞づくり (1/18)
8. 避難訓練
 - 第1回 火災避難訓練 (5/19)
 - 第2回 予告無し火災避難訓練 (9/29)
 - 第3回 予告無し地震避難訓練 (2/1)

【資料1 防災教育年間計画】

ア 保護者・地域と作る防災マップ

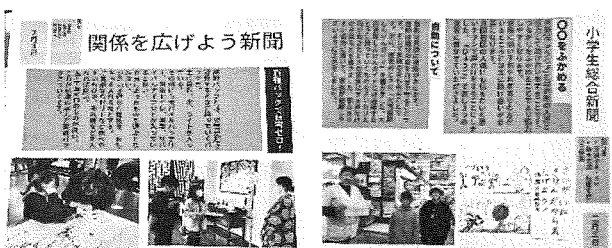
総合的な学習の時間で地域の地形、自然、産業の探索に加え、校区の「危険な場所」「安全な場所」「役に立つ場所・もの」を児童が実際にフィールドワークを行い、防災マップを作った。研究発表当日は、そのマップに保護者と共同して情報を書き込み、より正確なものに仕上げた。



【写真1 防災マップの発表】 【写真2 防災マップの確認】

イ 地域とつながる新聞作り

防災について地域へ発信するために、4・5年生は「避難バッグ」「自助」「共助」、6年生は「着衣泳」「フィールドワーク」「防災マップづくり」をテーマに、小グループに分かれて防災新聞の作成を行った。



【写真3 防災新聞1】 【写真4 防災新聞2】

② 令和4年度の成果と課題

第1回の避難訓練では、「マニュアルに沿った行動でよいのか」とコーディネーターに指摘されたほど、当時の教職員は災害時の判断や行動ができていなかったという。しかし、1年間、研修と実践を重ねたことで、教職員の防災時での行動が変容した。計画に基づいた研修、実践の重要性が見えてきた。

③ 令和5年度の取組

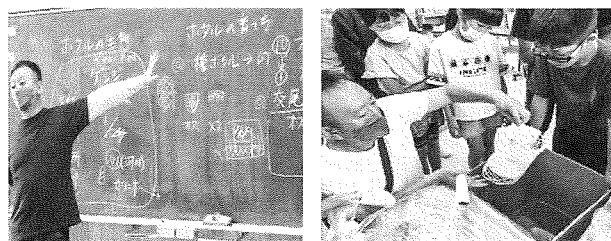
令和4年度の実践で、防災に対する意識の高まりが見られた。令和5年度は、防災教育を通して学んだ考え方や伝え方、体験から培った判断力や行動力をさらに磨き上げるよう、防災教育を教育課程の軸とし、主体的に「命を守る力」に変えていこうと考えた。

ア 「ふるさと学習」で防災意識を高める取組

防災教育で得た知識、判断力、行動力を児童らは維持し続けられるのか。また、防災の意識を地域とどのようにつなげ高めていくかが、課題となっていた。そこで、総合的な学習の時間で地域の素材を教材とした学習を展開し、児童が「どうすればよいか?」と常に問い続ける総合的な学習の時間や各教科での課題解決の場を教育課程に位置づけていけば、どんな場面に遭遇しても自分で考え、行動できる力が育つと考えた。また、地域を知り、地域を誇りに感じ、地域の中で共に生きる力を育む「ふるさと学習」で、自助、共助の判断や行動が身についていくと考え、防災教育を学校づくりの軸に位置づけることにした。

イ ホタル学習を通して地域復興に関わる取組

淮園小学校では、ホタルの種類や生息地域、生態について研究し、6年生で研究発表を行う。今年も宝泉寺温泉で旅館業をしながらホタルの飼育を続けている方をゲストティーチャーとして招き、地域河川の状態やホタルの生態について学習をしており、実際にホタルの採卵、孵化も成功した。地域の宝としてホタルの幼虫を大切に育てることで、児童たちにホタルで地域の復興を願い、その一役になろうとする意識が育っている。



【写真5 ゲストティーチャー】 【写真6 ホタル学習】

ウ 地域に発信することで育つ主体性

地域の方から豪雨災害やコロナ禍で途絶えていた宝泉寺温泉「星祭り」でホタル学習の発表をしてほしいと依頼があり、学校として参加することにした。「星祭り」の当日は、ホタルを飼育している5年生はホタルクイズを作成して大勢の前で発表した。6年生は、学習してきたことを各自がロイロノートでまとめ、映像も使って発表した。また、ホタルの種類や成長の様子、地域の特産品、温泉を紹介

介するパンフレットも国語科の学習で作成し、地域の方や観光客に配布した。



【写真7 星祭りでの発表】 【写真8 パンフレット】

エ 成果と課題

2年間の取組で、大きく二つの成果が挙げられる。一つ目は、避難訓練が形式的なものでなく、実際に災害が起きた時を想像して判断、行動する避難訓練ができたことである。防災教育の研究を重ねてきた教職員がいることは、校長として学ぶことが多く、自分のこととして具体的に災害を想定して判断や指示ができた。また、即座に批正会を開く意識ができていたことは、災害時だけでなく、学校運営の様々な場で活かされるものである。この教職員の意識向上も防災教育を実践して得た財産であり、何年たってもメンバーが変わっても引き継がれていくよう批正会習慣を定着させていくことが校長としての仕事であると自覚できた。

二つ目は、児童の成長である。防災教育を軸にした教育課程を通して、児童らに思いや考えを伝え合う姿が見られるようになっていく。地域を学ぶことで、どんな危険箇所があるのか、安全な場所はどこか、どこに行けば誰がいるのかなど、「地域のこと・もの・人」に対する知識が増え、主体的に考える力の一つになっていることがわかる。ホテル学習は、学習を通して、ふるさとを自然を知り、地域の人に学び、ふるさとを誇りに思い、自分を愛することができる体験的学習となっている。防災教育を軸にすることで、ホテルを守り、「命を守るためにどうすればよいか？」と当事者意識を持って考え行動する力となっていると確信できた。

(2) ここのえ小学校運営協議会での取組

令和2年度のここのえ小学校運営協議会の取組の一つに「各学校における防災教育の充実と小中・こども園合同の防災訓練の実施」を掲げて取組を始めた。その中で課題としてあげられたのは、避難訓練の実施を行う場合、各校で完結してしまうので連携ができないということであった。そこで「引き渡し訓練」であれば、保護者は兄弟姉妹関係などを考慮し、子どもをどのような順番で引き受けにいかなければならない

かなどを考えることで、防災について考えるきっかけにもなることから、「合同引き渡し訓練」を実施することになった。運営協議会の中で、実施要項を作成し、協議をすると同時に各校で引き渡しの係のマニュアルや引き渡しカードの統一化などを行っていった。訓練日を9月に設定し、実施する予定であったが、コロナ禍の中、実施を見合わせるようになった。令和3年度も同様、コロナ禍ということで実施できなかった。

令和4年度は、6月に感染症対策を取りながら一部のこども園と小中学校で実施した。

② 令和4年度の実施

令和4年度は、下の実施要項に沿って行われた。

九重町こども園・小中学校合同引き渡し訓練実施要項	
1 目的	大規模災害に備え、こども園、小学校、中学校が連携した引き渡し訓練を実施することにより、実際に災害が発生した場合のそれぞれの対応についての課題を把握し、各学校の防災マニュアルの見直しに役立てるとともに防災意識の醸成に資する。
2 参加団体	<ul style="list-style-type: none"> ○みづばこども園、飯田こども園 ○東原田小学校、野上小学校、新久小学校、飯田小学校、池田小学校、南山田小学校 ○各地区放課後児童クラブ ○ここのえ保護者会 ○東原田公民館、野上公民館、飯田公民館、南山田公民館
3 引き渡し訓練の日	令和4年9月22日（水）に一律に実施する。
4 訓練の想定	午後3時に震度5強の地震が発生し、幼児・児童・生徒の保護者への引き渡しが必要となる。（今回は訓練であるので、評定・道路規制などの設定は行わない）
5 訓練の流れ	<p>(1) 15:15 午後3時九重町で震度5強の地震が発生（教育委員会から各校に情報提供） 引き渡しについて15:30から実施するよう指示する。 各学校から保護者に引き渡しの連絡（メール・電話等）</p> <p>(2) 15:30 引き渡しの実施 あらかじめ保護者が届け出た引き渡しカードに照って引き渡しを実施する。 放課後児童クラブについては、小学校と同じ時間帯で対応する。 ※こども園、小学校、中学校に兄弟姉妹が在籍する子どもの引き渡し時間について連携をとる。</p> <p>(3) 18:30まで 引き渡し終了（全員引き渡し次第、教育委員会への報告）</p>

【資料2 引き渡し訓練実施要項】

③ 成果と課題

実施後、ここのえ小学校運営協議会の中で保護者アンケートを参考にし、課題と成果について検討した。その結果、次のようにまとめを行った。

○成果

- ・各学校とも事前の計画と周知ができていたので、先生方の誘導や受け渡し場所も適切でスムーズな実施ができた。
- ・訓練できたので、いざという時にも安心して行動できる。
- ・これまで、こういった状況を考えたことがなかったので、考えるよい機会になった。

●課題

- ・実際の災害の場合は、発生時刻によって学校にいる児童や下校後の児童など様々な状況が考えられるため、児童の状況に応じた対応が課題である。
- ・保護者によっては仕事や交通手段、家庭の

被災状況を考えると、学校に待機させることも検討していく必要がある。

これらの出された課題をもとに、令和5年度は、児童が放課後児童クラブにいる場合、下校して自宅にいる場合、学校にいる場合などを想定し、災害発生時間を少し遅らせて実施することにした。

(3) 令和5年度の合同引き渡し訓練の様子

6月12日に第1回このえ小学校運営協議会が行われ、合同引き渡し訓練の提案がされた。昨年度の反省から災害発生時刻を15時15分と設定とした。

① 飯田小学校における取組

飯田小学校では、まず、運営委員会において、災害想定や児童の状況の検討を行った。九重小学校運営協議会の想定から、建物被害がないとして、児童の状況に応じた対応を検討した。実施日である金曜日は、1、2年生が15時下校、3年生以上は16時下校である。3年生以上は、地震が治まったら体育館へ避難し、保護者の迎えを待つようにした。発生時刻が放課後となる1、2年生の状況は、A学校に残っている児童、B保護者の迎えにより既に帰宅している児童、C歩いて帰宅途中の児童、Dバスで帰る児童、E放課後児童クラブ(校舎内に設置)へ行く児童の主に5パターンが想定された。その一つひとつについて、児童クラブ職員にも入っていただいて職員会議で対応を検討した。

職員会議では、想定できるパターン全ての対応を児童クラブ職員と一緒に検討し、対応や担当を決めていった。

② 当日の様子

引き渡し訓練の開始を教頭がメールで知らせ、保護者から安否確認の返信をいただいていた。

<p>【九重町立飯田小学校】</p> <p>アンケート/回答済み 2023-09-15 15:31:18</p> <p>件名: 引き渡し・安否確認訓練です。</p> <p>内容: 今から引き渡し・安否確認の訓練を始めます。3年生以上の児童と児童クラブ利用の1,2年生は体育館に避難しています。無田バス・筋場バス利用の児童もバスには乗車していません。15時45分から引き渡します。お迎えに来てください。</p> <p>徒歩で下校した児童は、家に降り着いたらこの開封確認メールで無事を学校にお知らせください。</p> <p>アンケート内容: 児童の安否確認 <input type="checkbox"/> 帰宅している。(安全が確認されている。)(夕食含む) <input type="checkbox"/> 迎えに行く。 <input checked="" type="checkbox"/> まだ帰宅途中である。(帰宅したら学校に電話してください。) 行返信(50文字以内)</p>
--

【資料3 保護者あてメール】



【写真9 引き渡し訓練の様子】

5 成果と課題

(1) 九重町立准園小学校の実践

令和4年度の指定研究をきっかけに、教職員も児童も防災に対する意識は格段に向上している。「ふるさとを学ぶことは、防災教育につながっている」という思いを学校づくりの軸に据え、その教育課程の中で、自分で行動し、自信を持って学んだことを他者に伝えたい、広げたいという「主体的に学ぶ准園っ子の育成」に力を尽くしたい。

(2) このえ小学校運営協議会の取組

引き渡し訓練実施後、このえ小学校運営協議会で統一した保護者アンケートを行った。

アンケートの意見は、このえ小学校運営協議会で共有され、そこでまとめられた成果と課題は、各園・小・中学校全保護者へ配布している。アンケート結果から、町全体で行うことにより、子どもを迎えに行く順番や長時間子どもを迎えに行けない状況等、保護者にも様々な状況への対応に意識が繋がったと考える。

引き渡し・安否確認訓練について (お礼と報告)

令和5年度九重町子ども園・小中学校合同引き渡し・安否確認訓練の報告

9月15日に令和5年度九重町子ども園・小中学校合同引き渡し・安否確認訓練を実施しました。保護者をはじめ関係者には、お忙しい中、ご協力をいただき感謝申し上げます。また、その後のアンケートにもご協力いただきましたことを重ねて感謝申し上げます。

10月26日に第3回このえ小学校運営協議会を開催し、アンケートを基に本年度に向けて検討しました。もし改善が起ったときに、少しでも質でずに対応できるよう課題にしていきたいと考えています。また、教育委員会とも協議しながら子どもたちの安全と安心のために改善していきたいと思っております。

訓練の課題について

- ・実施時期については、できるだけ早期に行う方がよい。また、時間割は子どもたちの様々な状況を想定できて良かったのではないかと。
- ・バス通の児童への対応のために、バス運行会社と連携したマニュアルも必要である。本日は、様々な気象条件下や校時時の訓練、抜き打ちでの訓練なども必要である町全体の協力や連携も必要である。

別冊印刷や実施確認の方法等

- ・引き渡しの際にも、誰に引き渡したかを確認することが必要である。そのために引き渡しカードの活用方法を確認していく必要がある。
- ・メールなどの連絡方法が、読めない場合や停電の時にどのように連絡するのか課題である。その場合は学校に持参することも必要であるが、そういったマニュアルや食料の備蓄なども必要である。
- ・保護者に引き渡し後の自宅への帰着確認は行わない。訓練ならば、必要かもしれないが、実際に災害があった場合は逆に混乱する。引き渡し後は、保護者の責任になるので確実に引き渡しと安否確認ができればよい。

実施後について

- ・訓練ということで、気の緩みがあるのではないかと、災害はいつ、どんなときに発生するかわからないので、学校も保護者も緊張してやるのが大切である。
- ・災害は学校だけの課題ではないので、町全体で取組を進める必要がある。
- ・今回の訓練で新たな課題も見つかったため、それぞれの園・学校で解決できるものは学校と保護者で協議して対応をお願いしたい。また、災害アラートとの連携を今後も行いながら、安全で確実に引き渡しができるようにしたい。

基本点

子どもたちの命を守るためには、園・学校と保護者、児童クラブ、お父さんなど様々な関係の連携が必要で、毎年多くの災害が起っています。こうした災害から命を守るためには、訓練を通して親を子どもや家族でつづけていくことが大切です。訓練へのご協力に感謝するとともに、これからも、このえ小学校運営協議会へのご理解とご支援をよろしくお願い申し上げます。

このえ小学校運営協議会

【資料4 このえ小学校運営協議会の文書】

6 おわりに

人口減少の進む中、未来を担う子どもたちを、町全体で大切に育てることを目的に様々な取組がある。今回の防災教育についても、学校の立地によって想定される災害も避難の仕方も異なるが、町一斉に行うことで見えてくる課題がある。校長として、町全体の計画の中、学校の独自性をいかに出していくかが問われるところである。

「このえ学」を通して、地域の自然や地形等を学び、ふるさとを愛し、子どもたちの自他の命を守る心情を育てられるよう、校長の役割として地域と学校を繋いでいきたい。

各郡市からのレポート・発表資料等

I 大分市

大分市立城南小学校

校長 松原 幸恵

II 臼杵市

臼杵市立川登小学校

校長 大渡 克教

III 豊後大野市

豊後大野市立菅尾小学校

校長 衛藤 浩

ビジョンを示し学校組織づくりに向けた校長の指導性

～「Well-beingな学校」を目指して～

大分市立城南小学校 校長 松原 幸恵

はじめに

本校は、大分市街地の南西側に広がる丘陵地に位置しており、昭和30年の国道210号大道トンネル開通に伴う城南団地造成により急激に児童数が増加し、昭和44年4月南大分小学校から分離独立した。さらに、昭和56年4月には本校を母体校として荏隈小学校が分離独立した。その後「はなの森」住宅地も新設され、児童数が増加してきたが、現在は緩やかな減少傾向を辿る。令和6年12月現在の全校児童数は403名、18学級（特別支援学級4を含む）の中規模校である。

1 校長の指導性

★ビジョンを示す

グランドデザインは、学校を大きな船にたとえるならば、羅針盤と言えるであろう。乗組員である教職員はその羅針盤（グランドデザイン）を手に目的地（めざす学校像）に同方向のベクトル（意識）で向かい、生き生きと個々の役割を果たしていく。校長は常に大海原の波を読み、的確な航路を見出し、大きな波にも備える必要がある。そのため、校長は常に大海原について深く学び知り続ける努力をする必要がある。時流を見定め、ビジョンとしてグランドデザインを示すことこそ校長の果たすべき指導性の1つと考える。

★学校組織をマネジメントする

学校に集う誰もが幸せな状態であり続けるために必要な組織をマネジメントすることが校長の指導性として求められると考える。

そのためには、学校に集う「子ども」「教職員」「保護者」「地域」それぞれが「Well-being」を高めつつ、お互いに繋がり合うことが重要と考える。ここでは、「子ども」と「教職員」、「教職員」と「教職員」を繋ぐためどのように学校組織をマネジメントしたかその取組の一端を報告する。

2 実施・実践の状況

★ビジョンを示す

(1) 現状分析

4月1日着任早々、現状を把握し分析するために教職員にアンケートをとった。内容は○どんな子ども達を育てたいか ○どんな学校を創りたいか ○城南小学校の子ども達の素敵などころを3つ ○城南小学校の子ども達の残念などころを3つ ○城南小学校の職員の素敵などころ3つ の5点である。私自身が初めて赴任する学校の実態を知りたいという思いと職員が回答しやすいようにと考え、平易なアンケート形

式とした。これらの教職員アンケートの結果等を盛り込みながら、「令和6年度城南小学校グランドデザイン」を策定し教職員に示した。

(2) 原因特定

プロジェクトチームごとにグランドデザインを具体的にどう取り組むか話し合い、課題となっている原因を特定しその原因にアプローチした取組を設定させた。毎月のプロジェクトチーム会議では、この取組を評価して次の取組に生かす PDCA サイクルを回して実践を行っていった。

(3) 目標設定

「Well-being な学校」とは、学校に集う誰もが幸せな状態であり続けること、つまり子ども達が元気に登校後笑顔で下校し、教職員が元気に出勤後笑顔で退勤する学校だと考える。

子ども達に「夢を描く力をつける」「夢を実現する力をつける」「夢を探求し続ける力をつける」ために、学校教育目標を「主体的に学び、豊かな心をもち、たくましく行動できる児童の育成」と定めた。



学年	取組	評価	改善点	今後の取組
1
2
3
4
5
6

＜プロジェクトチームが策定した課題解決の取組 振り返り表＞

★ 学校組織をマネジメントする

(1) 「教職員」と「子ども」を「繋ぐ」

○年間行事予定に会議を精選して位置付ける

プロジェクトチーム会議を活性化させ、ボトムアップ提案を促すために「プロジェクトチーム会議」→「定例会」→「企画委員会」→「学年会」→「職員会議」のルーティンを定めた。会議を年間行事予定に位置付けたことにより、計画的に会議を運営することができた。

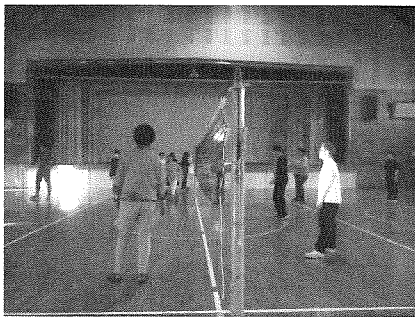
○企画委員会議題の年間提案計画一覧の作成

プロジェクトチーム会議の活性化のため、年間行事予定に定められた企画委員会の議題提案計画一覧を作成して提示した。計画的に見通しをもって、提案できるようにした。

ーマを決めてホワイトボードを使ったミーティングを実施した。ファシリテーター役を校長が指定してミドルリーダーに担わせ、ファシリテーターの在り方を学ぶ場とした。

○「協働タイム」の設定

目標管理シート面談の際、すべての教職員に「自分の良さや持ち味を生かしてやってみたいことは何か」と尋ねた。その中で、あるミドルリーダーから「もっと教職員同士でレクレーションを通して絆を深めたい」という話があった。そこで、彼に「協働タイム」のファシリテーターとしてレクレーションを計画、実行させた。勤務時間内の30分間を「協働タイム」として時間設定をし、全教職員でミニバレーボール大会を行った。日頃は、ベテラン教職員から指導を受ける若手教職員の頼もしさや素晴らしさを再発見したり、ミスのカバーし合う中で大きな笑いが起こったり、教職員同士の「繋がり」を創る貴重な時間となった。



3 成果と課題

○成果

ビジョンを示し学校組織をマネジメントしたことにより、「子ども」と「教職員」が「繋がる」時間の確保ができた。何よりも「教職員」同士の「繋がり」の構築が「Well-beingな学校」に繋がっていると、放課後の職員室での会話や教室で教材研究をする様子にて実感することができた。

○課題

グランドデザインというビジョンを示し、学校運営の舵取りを行ってきたが、「子ども」たちの中にこのグランドデザインがどれだけ浸透しているのか疑問が残る。今後は「子ども」たちと共にグランドデザインを創り上げる営みが必要と考える。

おわりに

「Well-beingな学校」を目指す私にとって、1番重要なのは「子ども達・教職員の元気と笑顔」である。そのためには、まず、私自身が「いつも笑顔でご機嫌に」いることが大切だと考えている。私が「いつも笑顔でご機嫌に」いるために、子ども達・教職員と「対話」を通して「繋がる」ことを大切にしたい。毎朝の交通指導で挨拶をしたり会話をしたりする中で、全校児童の顔と名前を覚えていく。また、教職員との「対話」は、面談や日常の雑談を通して「聴く」ことを大切に取り組んでいきたい。全ては「Well-beingな学校」のために。

新任校長実践報告

白杵市立川登小学校
校長 大渡 克教

1. はじめに

本年度、大分市の松岡小学校から赴任した。前任校は、自然豊かな地にあるものの、児童の8割が新興住宅地から通う大規模校であった。地域の環境、規模が大きく異なる学校への赴任、また教員生活の大半が中学校現場であることから、不安が大きかった。着任式・始業式での子どもの歓迎の言葉や明るい表情で校歌を歌う様子を見て、児童が楽しく学校で過ごせるために努力しなければならないという思いを強くもった。

現在、わが国では、子どもたちの抱える困難が多様化・複雑化したこと、持続可能な社会の作り手の育成を図る必要があること、地域コミュニティの基盤を形成することの必要があること、などから、学校教育にウェルビーイングが求められるようになってきている。学校関係者のウェルビーイングの向上のため、これまで学校教育で取り組まれてきた教育活動を見直しつつ、実行できることは着実にやっていく必要がある。

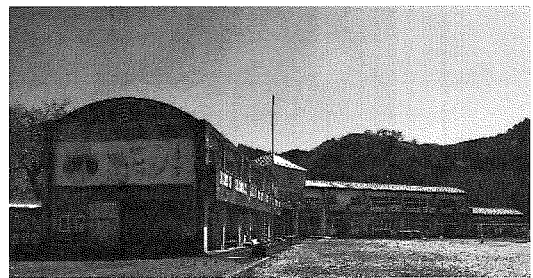
また、令和6年度に出された「白杵市公立学校のあり方に関する基本方針」には「児童生徒は知識や学力だけでなく、コミュニケーション能力や、多様な価値観、社会性、豊かな人間性などをバランスよく身に付けることが重要」とある。特に、現任校のような小規模校であれば、この見解は特に留意すべき事項であり、このような思いをもとに、これまでに実践したことを報告したい。

2. 現任校の概要

(1) 児童・保護者・地域の様子

現任校は、国道10号線沿いの野津町の南東部に位置し、県の絶滅危惧II類に指定されている希少な鳥類であるアオバズクの営巣地となるような自然豊かな地にある。

児童数は21名で、2・3年生と4・5年生が複式学級となる小規模校である。特別支援学級の設置はないが、5名が「個別の教育支援計画」、2名が「個別の指導計画」の対象



となり、うち5名が通級指導を行っている。「白杵市公立学校のあり方に関する基本計画(案)」においては、「学校の小規模化には、教員の目が児童生徒一人ひとりに行き届き、指導が充実するなどの良い面がある一方、人間関係が固定しやすく、子ども同士の交流や多様な意見に触れる機会が少なくなる」とあるが、この指摘そのもののような状況であり、授業中は児童同士でコミュニケーションをとることよりも、教員と児童が1対1で対話をするごとの方が多いことから、表現力の育成が大きな課題をして浮かび上がっている。

保護者は、全家庭が保護者会(PTA)に属し、保護者も本校出身者である方もいるため、学校に対して、敷居も低く、非常に協力的である。

また、地域は、学校に対し、「子どもたちのため」「うちの子どもたち」という思いの方が多く、川登地区振興協議会の事業計画と予算執行の多くが小学校のためにあるなど、学校に対する期待が高いことがうかがえる。

(2) 組織(職員の状況等を含む)について

それぞれが担う分掌も多い中、全職員が主体的に業務を遂行している。特にミドルリーダーにあたる年代の職員は、先を見越して企画立案、実践を行うなど業務遂行力が高い。互いにコミュニケーションをとり、助け合いながら取り組んでおり、管理職の指示はあまり必要がない。構成は以下のとおり。

①教員(7名) 60代1名、50代3名、40代1名、30代1名、20代1名

②市費負担職員(4名) 校務職員、図書館専門員(週2勤務)、複式授業解消教員、特別支援教育支援員
昨年度に比し、1.5人が減じられており、それぞれの負担は大きい。また、複式解消のため、教頭も授業を持つ。基本的に所属教員の空き授業時間はない。

3. 学校の取組

(1) 学校経営方針

学校教育目標を含む経営方針は以下のようなものである。これらは、前任校長が作ったものをベースにして、私がこれだけは大事にしたいという項目を加えてものである。

【学校教育目標】 夢や目標をもち、ふるさとで輝く「川登っ子」の育成

①めざす学校像 「子ども・家庭・地域の笑顔が集まる学校」

- ・安全・安心な学校
- ・自己肯定感の達成・自己実現を支える学校
- ・社会性を育む学校
- ・地域とともにある学校

②めざす子ども像 「かがやけ川登っ子」

			知識・技能	思考・判断・表現	学びに向かう力・人間性
かしこい子	・自分で自由に考え、自分らしく表現する。 ・身に付けた知識・技能を生活に生かす。 ・見通しをもって学習に取り組む。	知	○	○	
がんばりぬく子	・目標をもち、挑戦する。 ・失敗してもあきらめず最後まで取り組む。 ・真剣に掃除をする。	徳			○
やさしい子	・友だちや自分の良いところを見つけられる。 ・相手を思い、助け合う。 ・平和と郷土を愛する。	徳			○
げんきな子	・自分から明るい挨拶をする。 ・積極的に運動に取り組む。 ・規則正しい生活をする。	体	○		○

③めざす教職員像 「Mission・Vision・Passion をもった教職員」

- ・学校で働く一員としての使命感と誇りをもつ教職員
- ・分かる授業・楽しい授業の創造を支える教職員
- ・子どものために力を合わせて取り組める教職員
- ・生き生きと幸せに働くことのできる職場を作ろうとする教職員

(2) 現任校の学校運営体制・校内研究・生徒指導

①学校運営体制の充実

職員数が少ないことのデメリットもあるが、少ない人数であるがゆえに臨機応変に対応できるというメリットもある。校長・教頭(・教務主任)を構成員とする「学校経営戦略会議(随時開催)」、職員全員が出席する拡大運営委員会(月1回程度開催)、2つのチーム会議(「かしこい子・がんばりぬく子」部会、「やさしい子・げんきな子」部会 学期に1、2回開催)を通し、組織的に目標(学校教育目標と重点目標)と達成のための取組の共有と分担・連携の明確化を図り、これを補完する形で、「わいがや」的な職員間の情報交換が行われている。

②校内研究・学力向上の推進

児童は、少人数であるがゆえに、各行事で意見発表等をする機会が多い。一方で、言葉が不十分であっても意図を汲み取ってもらえること、教員と1対1で対話する機会が多いことなどから、自分の考えを伝えることはできるが、児童間での深まった対話や議論はできにくい傾向にある。

そのため、豊かな表現力の育成をテーマに校内研究及び学力向上の推進を図っている。具体的には、全教科で「話し方」「聴き方」の指導を行い、国語科や総合的な学習の時間を中心に振り返りの中に表現についての考察をさせるようにしている。

③生徒指導の徹底

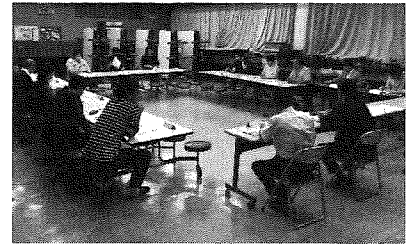
いじめや不登校といった問題はないが、小さなトラブルや行きしぶりはある。その中で、各児童の特性に関係する事案もあるため、ケース会議(学期に1回以上)、拡大運営委員会での情報共有を図り、配慮事項の徹底を行っている。

(3) 保護者・地域との連携

① 学校運営協議会の役割

学校運営協議会は、年間3回実施される。学校教育目標を共有し、その実現のための学校・保護者・地域の協働的な取組を決定・実施している。学校運営協議会が地域との窓口になっており、学校は、人材の必要が生じた際には、学校運営協議会の委員本人に依頼をすることが多い。

組織は3部会から構成されており、それぞれの部会が連携をしながら、責任をもって役割を果たしている。



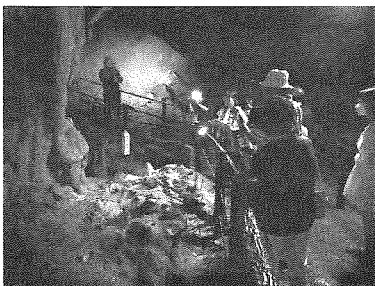
第1回学校運営協議会（6月）

	学びづくり部会	仲間づくり部会	二孝女の里づくり部会
目標	本の好きな子～1年間を通して「この本が好き」といえるように～	明るいあいさつで友だち(ふるさと)とつながる子	ふるさとに学ぶ子
手立て	<ul style="list-style-type: none"> ○地域学習サポーターによる読み聞かせ。(年間通して月1回) ○親子読書・家読(うちどく) ○図書館で子どもたちのおすすめの本の紹介コーナーを作る ○週1回の「読書の日」(宿題) 	<ul style="list-style-type: none"> ○風連鍾乳洞ガイド(8月) ○空き瓶回収(8月・1月) ○運動会への協力(9月) ○除草作業などの環境美化活動(8月) ○やまびこ運動(毎月) 	<ul style="list-style-type: none"> ○二孝女学習(常陸太田市立水府小との合同授業 年間3回) ○ひまわり学習(7月～10月) ○3年川探検(1学期) ○ノリウツギの自生の場の調査 ○紙漉き体験教室(11月) ○感謝の会(2月)

② 川登地区健全育成会・川登地区振興協議会への参画

健全育成会は、区長会、学校、保護者会、駐在所、補導員、読み聞かせボランティア代表、紙漉き保存会代表を構成員として、学校行事、保護者会活動、学校運営協議会で推進される取組に対して、経済的、人的に協力していただいている。会長は自治会長または振興協議会長を役職指定しているが、事務局は学校が担っており、教頭の負担になっているところが問題点である。

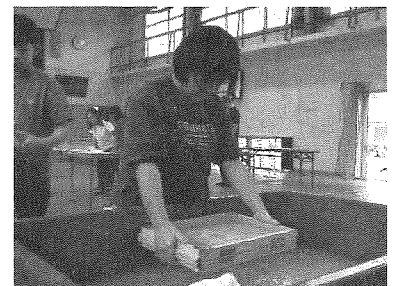
川登地区振興協議会は「ひまわりフェスタ」等の地域事業の主催者として活動しているが、児童が行う「風連鍾乳洞ガイド」「ひまわりフェスタガイド活動」「川登和紙作り」の際には、学校や保護者会と連携し、取組を支えてくれる団体である。今年度のひまわりフェスタへの参画については、小学校は共催者となり、深く運営に携わるところとなった。



風連鍾乳洞ガイド（8月）



ひまわりフェスタ（10月）



川登和紙作り（11月）

4. 校長としての実践

(1) 地域教材の活用、地域の取組への参画

川登小学校では、これまで垣河内川での川探検・川調べ、「風連鍾乳洞ガイド」、「二孝女物語」、「川登和紙作り」、「ひまわりフェスタガイド」など、学校区内にある自然、文化、イベントなどを教材として、学びを推進していた。教材として学ぶべき価値があること、また、地域からの要請等もあることから、今年度も継続すべき取組と考えた。ただし、地域素材の多さ、時間の確保、学びの継続性、児童・教職員の負担などが課題としてあがった。

例えば、昨年のひまわりフェスタの取組は、4、5年生がガイド活動、6年生が接客担当を、週休日にボランティアとして行っており、休息日の確保が課題となった。また、1～3年生が上級生の学びを見ることができず、学習の継続性の担保も課題として浮かび上がった。そこで、教職員間で協議し、以下の方針で地域教材

を学ぶこととした。

- ・総合的な学習の時間を、年間を通じて3～6年合同で行うこととし、地域教材をテーマに探究する。
- ・生活科でも地域に学ぶ機会を作り、その学びをひまわりフェスタでどのように生かせるかという視点についても教員間で継続審議する
- ・ひまわりフェスタの取組を全学年で行うこととし、ひまわりフェスタの中で、それまでの生活科、総合的な学習の時間での学びを生かす。

これにより、ひまわりフェスタの取組については、児童と教職員の休息日が確保でき、また、下級生も上級生の学習を目の当たりにすることができ、学習の継続性が担保できることとなった。

児童・教員の負担を減らすために、地域教材の取組を一部カットするということも考えられるが、日本的なウェルビーイングは他者を喜ばせることや他者とのつながりが感じられたときの協調的幸福感に基づくと考えられており、可能な限り、地域教材の活用は続けたいと考えた。

(2) 教員以外の人材の活用

① 学校運営協議会、地区振興協議会との連携、地域人材・保護者の活用

地域教材を生かしていくためには、学校運営協議会で熟考したのち、適当な人材を地域から探し、協力してもらうべきである。現任校の場合、これまでの取組の中で人材が蓄積はあるものの、将来的な人材の確保のため、学校が行う行事には保護者の参画を広く呼びかけをした。

② 外部人材の活用

学校での取組を効果的にするために、また、少しでも所属教員の仕事を軽減するために外部人材の活用は欠かせないものとする。今年度は、以下のような視点から外部人材を招聘した。

(ア) 校内研究のための人材

・大分大学大学院教育学研究科の令和6年度短期プロジェクトとの連携

現任校は、今年度臼杵市教育研究会助成研究の1年目にあたり、来年度、発表をすることになっている。この研究を充実させるために、臼杵市教委指導主事の招聘だけでなく、学理的なアドバイスをもらったり、研究の効果測定を第三者の視点からしてもらったりする必要があると考えた。そこで、大分大学大学院の後藤竜太准教授と共同研究という形をとり、異学年連携による総合的な学習の時間の取組について、アドバイスをもらうことになった。

・大分県教育庁社会教育課招聘

現任校の地域との連携及び学校運営委員会の運営はある程度進んでいるものとする。ただ、他校に比べどのように優れているのか、今後どのようなことを中心に据えていけばいいのか、第三者から意見を聞く必要がある。そのため、CSを推進する県教委社会教育課指導主事を招聘し、指導助言いただいた。

(イ) 児童に新しい視点を与えるための人材

・大分県立美術館

児童には多様な価値観、社会性、豊かな人間性などを身に付けさせることが重要である。そこで県立美術館の「スクールプログラム『びじゅつかんの旅』」に応募し、7月に校内で学芸企画課教育普及室の榎本寿紀室長にワークショップをしていただいた。その縁で、川登和紙作りも深く携わっていただき、11月14日には県立美術館で「スクールプログラム『びじゅつかんの旅』」として、コンテンポラリーダンスを指導していただく予定となっている。

・その他・・・スクールロイヤー(いじめ講座)

臼杵市高齢者支援課、地域包括支援センター(認知症キッズサポーター講座)

(ウ) 児童の体力向上のための人材(教員以外)

・大分トリニータサッカー教室 (株)大分フットボールクラブソーシャル事業部

・「ライフキネティック」運動教室 ライフキネティック公認パーソナルトレーナー

(3)外部への情報発信

現任校の地域との協働的な取組を支える意味で、週に3回以上のHPの更新をしている。効果測定はできないが、「HPを見たので」という問い合わせは数回あった。また、報道による情報の影響力は大きいと考え、報道への情報発信をできる限り行った。NHK、OBSとも複数回の取材をうけることとなり、その報道についての問い合わせは複数回あった。

(4)働き方に対する意識改革・行動改革

①勤務時間の縮減・休暇取得行使

現任校の勤務時刻は8:05～16:35であり、原則18:30を最終退勤時刻と設定している。また、金曜日をノー残業デーとし、それができない場合は前後の週に2回残業をしない日を設定するとしている。ただ、現在の学校現場の状況で、また、現任校のような小規模校は受け持つ分掌も多く、繁忙期に超勤縮減を求めるのは、持ち帰り仕事を増やすだけで、多忙感の解消にはつながらない。

超勤時間に、自分の納得する量の仕事を認めることも必要なのではないかと考え、そのうえでメリハリのある働き方をしてもらうことに注力したいと考えた。以下の点について、所属教員にお願いしている。

- ・「記念日年休」(自分のなんらかの記念日の前後2週間で年休取得をする)
- ・「無人島年休」(年休の時は何があっても互いに連絡しない)
- ・帰校する予定のない出張の際に、終了報告をしない

これにより、できるだけ学校から気持ちを離し、心情的にリラックスする時間を職員には与えたいと考えている。

②業務の精選

コロナ禍において、業務の精選は進んできたので、大規模な精選は難しいと考える。ただ、本来、職員が家庭で休息すべき週休日に出勤する回数については減じたいと考えた。そこで、年度当初、白杵ふれあい学校を含めた週休日の出勤日を以下のように変更した。来年度は、空き瓶回収の在り方を変更する方向で考えている。

年度当初実施予定	実施及び実施予定
①4月27日(土) 授業公開	①4月27日(土) 授業公開(授業+親子体力測定)
②6月22日(土) 愛校作業	②8月17日(土) 空き瓶回収+認知症講座
③8月17日(土) 空き瓶回収	③8月31日(土) 授業公開/愛校作業
④8月31日(土) 授業公開/愛校作業	④9月28日(土) 運動会
⑤9月28日(土) 運動会	⑤10月12日(土) ひまわりフェスタ
⑥10月中旬(土) ひまわりフェスタ	⑥10月26日(土) 椿蒸し(和紙作り)
⑦10月26日(土) 椿蒸し(和紙作り)	⑦11月2日(土) 紙漉き(和紙作り)
⑧11月2日(土) 紙漉き(和紙作り)	⑧11月3日(日) 紙たたき(和紙作り)
⑨11月3日(日) 紙たたき(和紙作り)	⑨1月11日(土) 授業公開 空き瓶回収
⑩1月11日(土) 授業公開 空き瓶回収	⑩2月22日(土) 学習発表会
⑪2月22日(土) 学習発表会	※白抜きは振替休業日なし
※白抜きは振替休業日なし	

③資料作成時間の削減

今年度、ペーパーレス化を進め、教頭の業務削減に努めている。ペーパーレス化したのは以下のものである。

- ・日案 (→Te-Comp@ssの予定表及びスプレッドシート上の日案に変更)
- ・会議資料(→Te-Comp@ss上で共有)

④取組の成果

教職員アンケート	はい	どちらかと言えればはい	どちらかと言えればいいえ	いいえ
年休や各種休暇は取りやすい。	38%	50%	13%	
業務の効率化を意識し、法定外労働時間が週15時間、月45時間を超えないよう気をつけている。	50%	38%	13%	

(5)「PTA」から「保護者会」へ名称の変更

「PTA」から「保護者会」と名称変更を行った。組織や活動内容に変更はない。名称変更することによるねらいは、保護者が主体的に活動する団体にしてほしいと思ったからである。本校の保護者はPTAに全員加入し、学校行事や地域行事への参加も積極的である。しかし、教頭が事務局を担うなど、まだ、十分ではない部分もある。そこで、組織や活動は変わらないものの、保護者を前面に出すことが大切なのではないかと考えた。

5. おわりに ～今後に向けて～

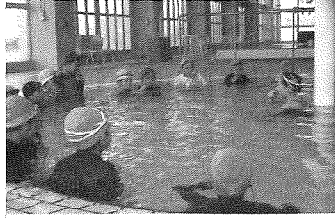
前任校長が残してくれたものを活用し、少しずつ職員と協議しながら、業務に取り組んでいるところである。白杵市、野津町、川登地区の文化を吸収しつつ、保護者、地域の方々など多くの方に支えられながら数カ月の取組が終わったところである。

次年度は白教研研究助成発表があり、それに向けて本年度のまとめと振り返り、来年度の計画づくりにこれから着手するところである。また、「あり方に関する基本計画(案)」の「案」が取れると統合に向けての動きも並行するようになり、野津小、南野津小と連絡・協議すべきことも加速度的に増えていくことが予想される。そうなってくるとさらに大幅な業務の見直しを進める必要も出てきそうである。

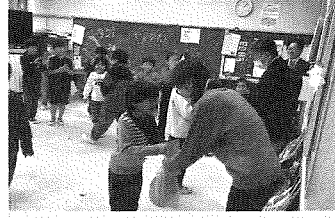
多忙化を解消することはできないが、少しでも多忙感を減少させることは可能である。いきいきと働く教職員を見て、幸福感を得る児童も多いであろう。そのために、多用な中にもやりがいや楽しさがある職場づくりを今後とも続けていきたい。自分だけの力や考えを押し通すのではなく、様々な立場の人を頼りながら、最適解を模索することが肝要であろう。



いちご狩り



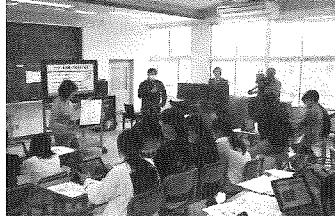
チーム「スイミング」地域人材



地域の皆様への「感謝のつどい」



GONちゃん活用市民「防災意識調査」



防災デジタルマップでの発信



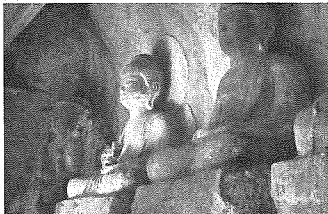
IT企業とドローン体験学習

年度初日 4月1日の最初にやったこと
 ↓
 校長より職員へプレゼンテーション
 「選ばれる学校」づくりの推進
 ～「小規模校活性化TRY」第2ステージ～

新スタッフ体制でまず共通理解！
 「本校の存在価値」 & 「地域の中核となって輝ける学校づくり」

豊後大野市立菅尾小学校を中心とした菅尾地域

市を代表するジオサイト 国指定重要文化財「菅尾磨崖仏」

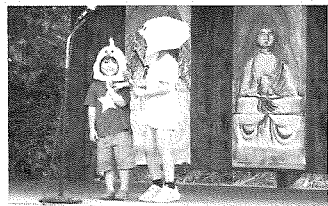


石仏火祭り（8月）児童も参画

石仏火祭り（8月）職員も参画



絶景ジオサイト「江内戸の景」



本日の内容

- I 小規模校活性化TRY事業について
- II 魅力を創造し、発信する学校づくり
- III 人材育成
- IV 成果と課題

I 「活性化TRY事業」について 「活性化TRY事業」これまでの10年【第1ステージ】



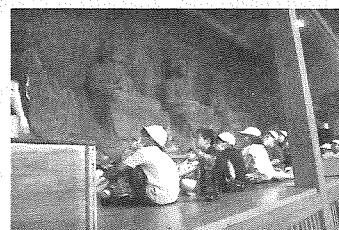
- 1 学校存続の危機に地域が立ち上がり
- 2 市当局と折衝
- 3 市教委は存続を支える制度設計
豊後大野市小規模校活性化TRY事業
⇒隣接する小学校区より就学可
- 4 学校は地域と一体となった教育活動の魅力を磨き上げ
- 5 市教委は耐震化及び校舎リ
ニューアル工事で受入準備
- 6 児童数は2.5倍前後を推移

I 「活性化TRY事業」について 直近5年間の児童数の推移

「選ばれる学校」づくり ～これからの活性化TRY【第2ステージ】～

<直近5年間の児童数推移>

- ・令和2年度：75名（校区外21名：28.0%）
- ・令和3年度：83名（校区外23名：27.7%）
- ・令和4年度：80名（校区外18名：22.5%）
- ・令和5年度：74名（校区外20名：27.0%）
- ・令和6年度：71名（校区外26名：36.6%）



菅尾っ子のシンボル：菅尾磨崖仏

Ⅰ 「活性化TRY事業」について
もっと広く、市内外より「選ばれる学校」へ！

○ 「新1年生予定者」の倍増を！

- <R6年度 新1年生 11名> <R5: 11名>
- ・ 校区内居住 ⇒⇒⇒⇒⇒ 5名 (4名)
 - ・ 他校区より ⇒⇒⇒⇒⇒ 6名 (7名)
 - ・ 大分市からの移住 ⇒⇒ (1名)

※今後移住を検討中：1名

令和6年度 豊後大野市立菅尾小学校 グランドデザイン

豊後大野市学校教育基本方針 地域とともにあるへアタゴン教育 ～「主体的な自己実現」をめざして～
三重町統一教育目標 ふるさとを愛し、心身ともにたくましく、未来を切り拓く力をもった子どもの育成

菅尾小学校2024 「選ばれる学校」づくり ～「選ばれる魅力」の創造と発信～
★★★ 「活性化TRY」第2ステージ～広く市内外より選ばれる学校の創造 ★★★

<p>確かな学力</p> <p>重点1 教科等横断的な学びの充実 ・ 思考力、判断力、発信力の向上</p> <p>重点2 対話と振り返りのある授業の充実 ・ 協働的な学びの質の向上</p> <p>重点3 GONちゃん活用の充実 ・ 個別最適な学びの向上</p> <p>重点4 学びに向かう集団の趣き上げ ・ ほめる指導と個に応じた支援の充実による学びに向かう力の向上</p>	<p>郷土学</p> <p>重点1 菅尾に誇りをもち、よりよい郷土を創造する「礎」の醸成 ・ まちづくり推進課、ジオパーク推進協議会との協働</p> <p>重点2 学びをプレゼンする発信力の向上 ・ 大分大学、各種専門機関との協働</p> <p>重点3 「チーム菅尾」との協働 ・ 学期にのべ150名を超える地域人材活用</p>	<p>豊かな心・健康な体</p> <p>重点1 互いに認め合う多様性の尊重 ・ 教育相談コーディネーターを核とした個に応じたケース会議の充実</p> <p>重点2 縦割り班活動の充実 ・ 小中一貫「期」を踏まえた活動の充実</p> <p>重点3 人権・部落差別解消教育の日常化 ・ 子どもの現実から深く学ぶ営みの充実</p> <p>重点4 運動に対する愛好度の向上 ・ 愛好度を高める体育的活動の充実</p>
<p>特別支援教育</p> <p>重点1 個に応じた学びの充実 ・ 自立と社会参画に向けた支援体制の充実</p> <p>重点2 機動的な支援の充実 ・ 特別支援教育コーディネーターを核とした日常的な情報共有の充実</p>	<p>学校環境の充実</p> <p>重点1 安心、安全、きれいな学校 ・ CSの活用等を通じた環境整備の充実</p> <p>重点2 人材育成 ・ 組織的なOJTによる若手教員の育成</p> <p>重点3 働き方改革の推進 ・ カリマネと個々のタイムマネジメント</p>	
<p>小中一貫教育・校種間連携</p> <p>★9年間を見通した教育活動と各子ども園等との連携充実</p>	<p>キャリア教育</p> <p>★夢や目標に向かった教育活動の充実</p>	<p>コミュニティースクール</p> <p>★三重町の子どもを育てる会での熟議・役割分担</p>
魅力1 ダイナミックな郷土学	魅力2 「チーム菅尾」	魅力3 きめ細かな「月次決算」

Ⅱ 魅力を創造し、発信する学校づくり
学校経営ビジョンの明確化

郷土学

1. 選ばれる魅力創造 2. 発信

①ダイナミックな郷土学

「教科等横断的な学び」で思考力と発信力

②地域とともに

「チーム菅尾」

③短期PDCA

「月次決算」

菅尾の魅力を発信

- ・ 学校運営協議会
- ・ メディア等発信ツール
- ・ 「口コミ」等

メッセージ: 「菅尾に来て学ばせてみませんか？」

II 魅力を創造し、発信する学校づくり

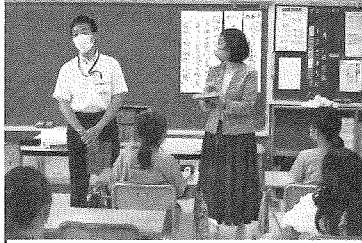
郷土学

①ダイナミックな 郷土学

～ 研究主任⇒地域人材、研究機関、民間等の教育資源を惜しみなく投入～

(1) 大分大学と協働した「古典 平家物語体感会」

花坂 歩教授を中心とした研究グループとの年間を通じた共同研究



5年国語科「古典の豊かな読み」



菅尾隆彦氏と立体音響・平家物語のコラボレーションを県下へ発信



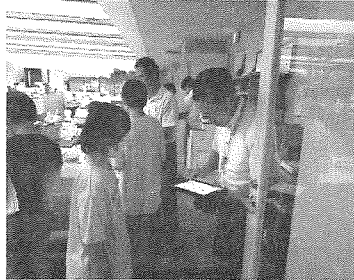
II 魅力を創造し、発信する学校づくり

郷土学

①ダイナミックな 郷土学

～ 研究主任⇒地域人材、研究機関、民間等の教育資源を惜しみなく投入～

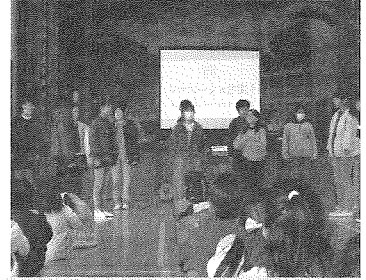
(2) 民間IT企業・市危機管理室と協働した「防災ジオ学習」



GONちゃんでも市民への意識調査



デジタル防災マップづくり



「学びに対する憧れ」を全校へ

II 魅力を創造し、発信する学校づくり ※一部

②各担当者が取り込む⇒地域とともに「チーム菅尾」

～各学期にのべ150名超参画～



チーム放課後TRY



チーム書写



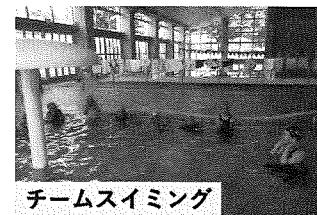
チーム花苗



チームアグリ



チーム防犯

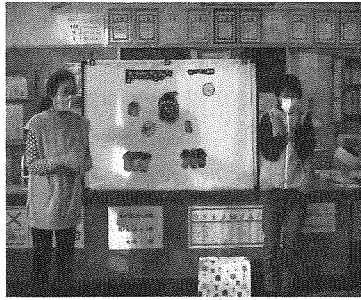


チームスイミング

II 魅力を創造し、発信する学校づくり ※一部

②各担当者が取り込む⇒地域とともに「チーム菅尾」

～各学期にのべ150名超参画～



チーム読み聞かせ (パネルシアター)



チーム餅つき



チーム道の駅 (地域発信のプラットフォーム)

年間を通して協働できる 伝統の「チーム菅尾 人材リスト」

II 魅力を創造し、発信する学校づくり

②教務主任が熟議⇒地域とともに「チーム菅尾」

～各学期にのべ150名超参画～

地域目線・市民目線での説明と発信

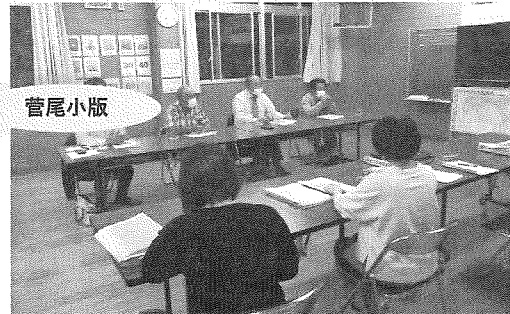
CSで地域の意欲の喚起



三重町全体

学校の戦略「CS委員の選定」

- ・学校存続の危機を乗り越えた中核人材
- ・菅尾地域振興協議会から代表



菅尾小版

II 魅力を創造し、発信する学校づくり

②教頭：区長会との協働⇒地域とともに「チーム菅尾」

～各学期にのべ150名超参画～

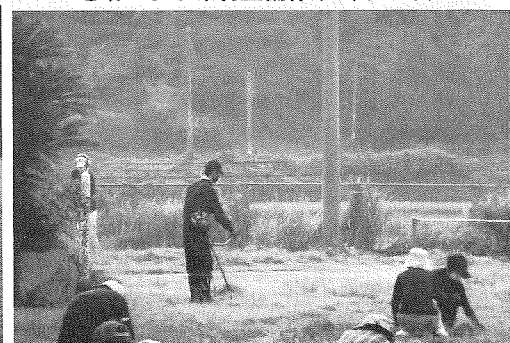
伝統の「チーム菅尾 人材リスト」

CSと区長会で追加や見直し



R6：区長会（地域）による初の試み

地域による環境整備作業（今週末）



II 魅力を創造し、発信する学校づくり

②教頭と担当者が取り込む⇒地域とともに「チーム菅尾」
 ～各学期にのべ150名超参画～

地域と双方向のコミュニケーション

「顔の見える」連携

➡ 学校を核に、移住を含めた地域の活性化を目指す

区長会・菅尾地域振興協議会と協働した「地域住民への学校公開」

地域の皆様への「感謝のつどい」



III 人材育成

主任クラスの育成～短期PDCA「月次決算」

～ 教務主任⇒3つのプロジェクトで毎月1回の児童のきめ細かな把握(検証・改善)

管理職

教務主任【釘宮】・ 月1回PDCA組織運営

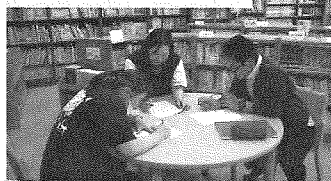
確かな学力PT



カリキュラムマネジメントから

世代の融合

豊かな心・郷土愛PT



危機管理から

知恵を出し、風を通し、活力ある職場づくり

健やかな体PT



人材育成から

III 人材育成

主任クラスの育成～短期PDCA「月次決算」

～ 管理職⇒各リーダーの「マネジメント指標」の明確化 ～

学力PT【リーダー：木村】



◆毎月のPTにて、取組内容及び国語・算数の指標、単元末テスト平均正答率83%（当初）から「1%ごとの上積み」について検討

心・郷土愛PT【リーダー：川野】



◆月1回以上のPTで、「兆しの把握」及び「未然防止・早期対応」
 ◆目標へ効率的にアクセスするための取組を機動的に構築

体力PT【リーダー：藤澤】

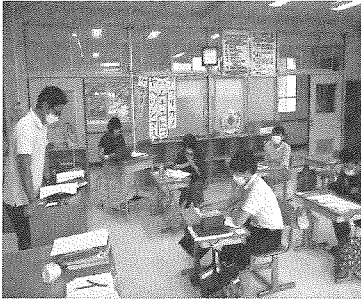


◆毎月1回のPTで、取組指標と達成指標の機動的検証・改善
 ◆3学期の「菅尾版体力・運動能力調査」実施による比較・検証

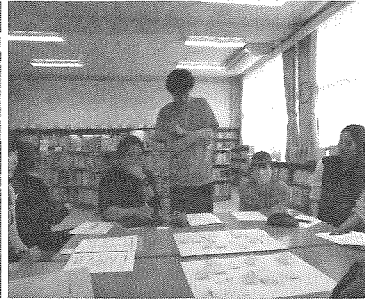
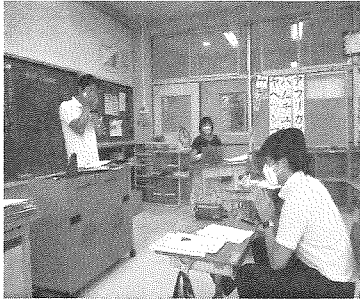
学校運営方針と「月次決算」結果について、保護者、地域とも随時共有

Ⅲ 人材育成 若手教員の育成～校内研究での若手の出番

全教員を児童に見立てた「模擬授業」



我々は何が学べたか「まとめ」



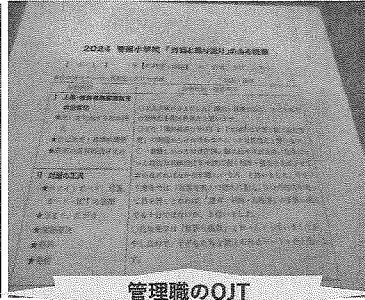
教務・研究主任の企画指導 ⇒ 若手が主体的に学べる校内研究

Ⅲ 人材育成 若手教員の育成～校内研究での主任等の指導

教務主任・研究主任の「その場を捉えた指導・助言」



管理職の授業観察（観察シート）



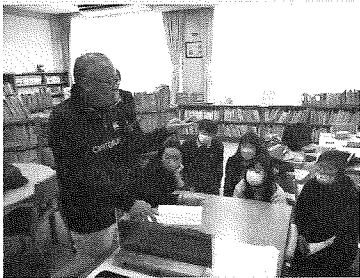
組織的な育成

管理職のOJT

教務・研究主任の企画指導 ⇒ 若手が主体的に学べる校内研究

Ⅲ 人材育成 若手教員の育成～ベテラン教員の「模擬授業や示範授業」

ベテランによる全教員を児童に見立てた「模擬授業」及び「示範授業」



教務・研究主任の企画指導 ⇒ ベテランがノウハウ継承に意欲を燃やせる校内研究

Ⅲ 人材育成

番外編～職員が「地域の思い」を知る



若手教員とCS委員の「ご飯」
【「かしこまらない」「夕ご飯感覚」】

おわりに「取組の成果」

①発想の転換

- ・地域等との協働について「成果」と「有効性」を実感
- ・大分県プレゼンテーションコンテスト2年連続「最優秀賞」受賞の事例も 【R5 市教委より学校表彰】



おわりに「取組の成果」

②地域の核として区長会等との連携強化

R5年度末時点

<地域>

- 学校の児童の夢や目標に向かって教育活動を推進する取組への肯定率 ⇒⇒ 100%

<家庭>

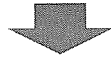
- 学校の情報発信に対する肯定率 ⇒⇒ 100%



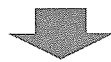
おわりに「取組の成果」

③地域との双方向のコミュニケーション

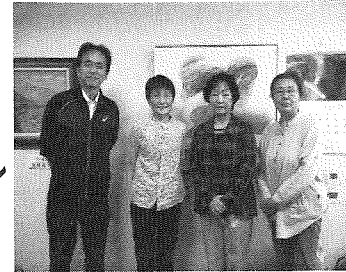
- ・用語を含めてわかり易く地域目線・市民目線での発信と熟議



学校へのエールや意見交換



地域との日常的なコミュニケーション

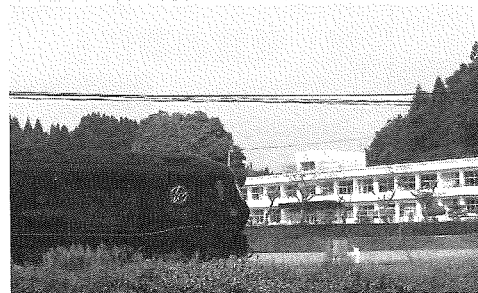


おわりに「今後の課題」

持続可能な取組にするために・・・

★激しい少子化、スタッフの新陳代謝・・・。

学校の存在価値へ日々返り、
何を改善し、学校づくりを
ブラッシュアップしていくか。
市教委の制度設計と併せて
継続的に検討する必要。



今後とも、菅尾小学校に対する
ご理解とご支援を賜りますよう、
お願い申し上げます。

「『おおの』の教育」を受け継ぐ

Ⅰ 新校舎建設

Ⅱ ともに集い、創り出す



おわりに

先に示された教育振興基本計画のコンセプトとして、〈持続可能な社会の創り手の育成〉〈日本社会に根差したウェルビーイングの向上〉が示されました。私たちは、本基本計画のもと、生涯を通じて学び続け、多様な専門性を有した質の高い教職員集団を形成し、「令和の日本型学校教育」の構築をしていくことが求められています。

今、学校教育では、慢性的な教員不足・採用倍率の低下、いじめの重大事態の発生件数増加傾向、コミュニティ・スクールや地域学校協働活動の自治体間・学校種間の差などの課題が山積しています。これらの課題は、決して校長一人で解決できるものではなく、様々な方面と連携・協力していきながら解決していかなければなりません。その課題解決に向けて、真っ先に関係を構築できるのは、校長同士であることは言うまでもありません。

これまで、各都市の研究実践を交流し合うために「実践事例集」を毎年発刊してきました。本「研究のあゆみ」は、それまでの「実践事例集」の趣旨を引き継ぎ、県内各都市の校長をつなぎ、お互いの学びをより深めていくための資料として、コロナ禍を経て、令和3年度に初版が発行されました。

今年度も、九州大会・全国大会・大分県研究大会が通常開催の型で行われ、学校における諸課題の解決に向け、充実した議論を交わし、研究実践を交流し合いながら、お互いの関係を構築してきました。これらの実践報告からは、学校管理職や学校組織全体として日々の経営ビジョンを振り返り、改善し、成果や課題等を踏まえて更なる改善を図っている県下各地の校長先生方の姿が見えてきます。改めて自身の日々の稚拙をふり返り、身が引き締まる思いがします。

令和6年度版「研究のあゆみ」が、校長先生方の学校経営の一助となることを願ってやみません。

本「研究のあゆみ」に掲載されている九州大会の報告者の方々、県下各地での実践を報告していただいた方々に心から感謝申し上げます。

来年度も引き続きよろしく願いいたします。

発行者 大分県小学校長会
会長 山元 一哉
住 所 大分市下郡字長谷496-38
大分県教育会館内
TEL 097-556-2655
印刷所 大分市岩田町2丁目3番27号
有限会社 舞鶴孔版
TEL 097-578-8287